



栃木市平川遺跡 出土品整理報告書

二〇二三

國學院大學栃木短期大学

栃木市平川遺跡

出土品整理報告書



2023

國學院大學栃木短期大学

刊行にあたって

私は昭和43年5月から49年3月までの6年間、社会科担当の教員として國學院大學栃木高等学校に在職しました。その間に担当していたクラブが考古学でした。

当初は社会科研究会として、政治・経済・地理・歴史など社会科全般を活動の内容としていましたが、私が担当してからは考古学に特化し、他の分野の活動は行っていません。クラブ名も社会科研究会から考古学部に名称を変更し、遺跡の勉強一本になりました。土・日には周辺の畑地を生徒たちと歩き、土器・石器等を採集し、その地点を地図上にマークし、遺跡分布図を作成しました。採集した資料は時期などを調べ記録しました。

夏休みなどの長期休暇には、他県にも足を延ばし、群馬の古墳、千葉・茨城の貝塚などを生徒たちと見て歩きました。多分2年目の夏だと思います。部員の自宅前の畑（栃木市合戦場）で土器や黒耀石の破片が多数拾えるとの話がありました。

国への届け出を済ませ、調査に取り掛かりました。庭先の小さな畑だったので、せいぜい6m四方位かと思いますが、そこに住居址1軒分の円形の落ち込みを確認しました。十文字にベルトを設定し、掘削を開始しました。調査当初は、堅穴住居址と思い、床直などとの名称を使いましたが、完掘後、炉址やピット？もなく、堅穴状の落ち込みとしました。

整理作業も、部活動の一環として、放課後生徒達の手で行い、文化祭では接合した土器や石器等を展示しました。報告書の完成を待たずに退職し、東京に戻りましたので、そのことが気掛かりの一つとして残りました。

栃木市は私の青春を育んだ第二のふるさどです。良き友に恵まれた心温かい町でした。巴波川のせせらぎ、蔵屋敷の黒塀、川沿いの柳、学園への坂道を自転車で登っていく生徒達、我が青春の一ページがここにありました。

令和5年1月30日

元國學院大學栃木高等学校考古学部顧問

早川 泉

例 言

1. 本書は、栃木市平川遺跡（旧称：北堀の内遺跡、栃木市 No5636）の遺物整理報告書である。
2. 発掘調査は、1969年7月21日～7月30日に國學院大學栃木高等学校考古学部によって行われた。
3. 本書に関わる整理作業は2020年度～2022年度に國學院大學栃木短期大学日本文化学科日本史フィールド開講科目「考古学演習Ⅰ・Ⅱ」、「考古学フィールドワークⅠ・Ⅱ」および考古学研究会の活動として行った。
4. 整理・報告書刊行には、「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅡ～Ⅳ」として、栃木県大学地域連携支援事業の補助を得た。
5. 國學院大學栃木高等学校考古学部の活動については、早川泉氏（元顧問）、芹沢清八氏（シン技術コンサル・元部員）、川崎義雄氏（元國學院大學久我山高等学校考古学部顧問）より教示を得た。
6. 調査区隣接地の確認調査については、栃木市教育委員会より資料提供を得た。また、市内の中期遺跡の確認については、石川由利子・尾島忠信・木村等・高見哲士・初山孝行・福地宣弘の各氏の協力を得た。
7. 平川遺跡の立地環境については、河野重範氏（栃木県立博物館）より教示を得た。
8. ドローンによる空中写真は、白鳥昇一氏に依頼した。
9. 縄文土器の分類は、塚本節也氏（益子町教育委員会）の指導と伊沢加奈子氏（壬生町立歴史民俗資料館・本学卒業生）の助言を得た。土師器については山口耕一氏（下野市教育委員会）より教示を得た。
10. 縄文土器のデジタルトレースの一部は、NPO法人井草文化財研究所に委託した。
11. 本書の編集は、大工原豊・中村耕作が行った。
12. 本書に関わる出土遺物・現場写真・整理記録は國學院大學栃木学園参考館が保管している。
13. 本書は「全国遺跡報告総覧」にてPDF版を公開する。
14. 本書掲載土器の3Dデータ、写真データ・実測図データの一部は國學院大學栃木学園参考館の「こくとち360°まるみえミュージアム」で公開する。
15. 整理参加者は以下の通りである。

稲葉あすみ 木村美達 齋藤保乃花 鶴見直子 村山厚弘（2020年度卒業生）

伊勢谷望果 植松莉聖 小栗咲希 越志風沙 久保有加 佐藤夢実 佐藤有紗 椎名あい 水塚隆晟 蜂巣海斗 日向野未帆 布施晴也 山崎彩恵子 山入端優華 横倉貴大（2021年度卒業生）
上原勇斗 大久保綾乃 尾作紗枝 木村久雄 山口駿（2022年度2年） 家田貢希 菅原駿馬
竹屋蘭音 湯本廉 脇坂友琉（2022年度1年） 都築葵惟（國學院大學学生）

中村耕作（准教授：2020～2021年度、現国立歴史民俗博物館） 大工原豊（准教授：2022年度）
岸美知子（助手） 高垣美菜子（学芸員）

協力：國學院大學栃木高等学校（校長：青木一男）

國學院大學栃木学園参考館（館長：酒寄将志：2020～2021年度、坂本達彦：2022年度）

目次

I 平川遺跡の意義と本書の目的	4
1. 文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探る	4
2. 土器文化圏再編期の遺跡としての平川遺跡の意義	4
2. 低地遺跡としての平川遺跡の意義	5
3. 高等学校における考古学活動としての意義	5
II 平川遺跡の立地と調査区	6
1. 平川遺跡の立地	6
2. 周辺の縄文時代遺跡	6
3. 調査区の位置と周囲の確認調査	12
III 調査・整理の経緯と方法	16
1. 調査の経緯と調査の方法	16
2. 整理の経緯と方法	24
IV 竪穴状遺構と遺物出土状況	26
1. 竪穴状遺構	26
2. 注記と遺物出土状況	27
V 縄文土器	36
1. 平川遺跡の縄文土器の概要	36
2. 加曾利E I式以前～古段階の土器	38
3. 加曾利E I式中段階の土器	42
4. 加曾利E I式新段階の土器	54
5. 加曾利E I式中～新段階の土器	56
6. 浅鉢・有孔鈿付土器・土器片加工円板	64
7. 底部・土師器	68
VI 縄文石器	70
1. 押圧剥離系列の石器	71
2. 直接打撃系列の石器	72
3. 使用痕系列（形状非選択）の石器	73
4. 使用痕系列（形状選択）の石器	75
VII まとめと展望	76
参考文献	78
報告書抄録	80

I 平川遺跡の意義と本書の目的

1. 文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探る

栃木県栃木市は、東武日光線とJR両毛線、東北自動車道と北関東自動車道など南北／東西の交通の結節点に位置する。これは古代の東山道や下野国府、近世～近代の例幣使街道・巴波川水運など、歴史的にも文化交流の中核として廻ることができ、現在は特に「蔵の街」として周知されている。

國學院大學栃木短期大学日本文化学科日本史フィールド（旧日本史学科）は、こうした地元の歴史的資源である遺跡・古文書・石造物等を教材とした実践的な教育、調査研究を実施したり、地域の調査・研究に参加してたりしてきた（國學院大學栃木短期大学2015～2020、旧・梅の宮宿、本沢河岸周辺）の歴史的資産を活用した地域活性化事業実行委員会2017～2018、中村2021ほか）。

特に近年、考古学分野で注目しているのが、縄文時代である。それ以前の氷河期であった旧石器時代と異なり、縄文時代は、現在とはほぼ同様の気候・環境となり、日本列島各地の地域色が生まれた時代である。しかし、各地域は疎遠であった訳ではなく、様々な形で交流が行われてきた。栃木市は南東北・東関東・西南関東などの地域文化圏の接点として、様々な情報がやりとりされており、上記の地域交流の核としての役割を既に果たしていた。

そこで、2015年度より後・晩期を中心とする藤岡地区の中根八幡遺跡の学術発掘調査を行い、「環状盛土遺構」の形成という考古学的課題に挑むとともに（中根八幡遺跡学術発掘調査団2015～2023）、2016年度からは「とちぎの古代遺産新発見Ⅰ～Ⅲ」のテーマで、地元中根地区・栃木市教育委員会文化課とともに、その調査研究の成果を周知し、また地域の方々や子どもたちを対象に遺跡の魅力を伝えるワークショップを開催してきた。2019年度からは、「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅠ～Ⅳ」と題し、栃木地域のアイデンティティ形成という点に焦点をしぼり、活動を続けてきた。こうした中で、2020年度からは、中期の平川遺跡を対象に加えることで、交流の歴史的な厚みにも迫ることとしたのである。

2. 土器文化圏再編期の遺跡としての平川遺跡の意義

縄文時代には、各地域で特徴的なデザインの道具や施設がつくられており、地域性や、それを越えた交流の手掛かりとなっている。特に、土器様式は地域差・時期差をよく反映するものと考えられているが、特に縄文時代中期中葉（約5000年前）の東日本は各地域の土器様式が林立する時期を経て、いくつかの大様式にまとまっていくことが知られており、細かな地域的まとまりや、相互の交流の様子を知る上で重要である。本書の対象となる平川遺跡はまさにその過程の遺跡である。

栃木県周辺の中期中葉の土器様式は、大きくまとめると、南東北系（大木式）、新潟系（火焰土器）、東関東系（阿玉台式）、西関東・甲信系（勝板式）などがあり、さらにそれらの折衷様式が多数知られている。これらが、より広範囲の加曾利E式に変化していくのだが、その成立期には、内部にかつての諸系統が継承されている。この地域に特徴的な袋状土坑には、同時に廃棄されていたとみられる多様な土器が取められており、考古学上の時間の目盛りである土器編年を組み立てるうえで重要な役割を果たしてきた。南東北系・新潟系・東関東系の3者が交錯する栃木県那須地域は、海老原郁雄（1999

ほか)が「接圏」と呼び、この時期の土器だけでなく前後の時期も多様な文化が混在する地域として注目している。また、塚本節也(2014ほか)は、細かい土器の地域差をもとに文化交流のあり方を検討している。

こうした栃木県北半の那須地域を中心とする研究に対し、栃木県南部の研究は小山市寺野東遺跡や上三川町島田遺跡、野木町松原北遺跡、佐野市馬門南遺跡〔第1図〕など少数の遺跡の検討(塚本2004、江原2006)に限られている。比較検討の素材が限られていたことが要因の1つと思われる。しかし、栃木県南部地域は、那須地域とは別に、西関東との接点として重要な位置を占める。こうした中で、今回報告する平川遺跡の土器は、空白の栃木市域の資料として大きな役割を果たすことが期待されるのである。

3. 低地遺跡としての平川遺跡の意義

考古学上のもう1つの重要性は、平川遺跡が低地に立地するという点である。一般的に、縄文時代中期の集落は台地縁辺部に立地することが知られているが、当遺跡は地形区分上の低地の中の微高地に立地する。

栃木県における縄文時代の低地利用については、上野修一(1989)が検討し、近接する田通遺跡でも注目されている。これらの検討によれば、思川低地には、中期後葉の田通遺跡、後期前葉の平柳町三丁目遺跡、長原東遺跡、下野国庁跡などで、後期を中心としながらも、中期後半から断続的に継続して営まれたことが知られている。こうした中で、平川遺跡は田通遺跡よりもやや先行し、上述の諸遺跡よりも短い期間のみに営まれた遺跡として、当地域における低地利用の研究に新たな資料を提供することが期待される。

4. 高等学校における考古学活動としての意義

1960～70年代は、高等学校のクラブ活動としての考古学研究が盛んに行われた時期であり、文化財行政や専門調査機関の未整備期における考古学の担い手として、また研究者育成の場として、その活動が改めて評価されている(市元・池内2014、市元2018、九州国立博物館 2014・2016・2018)。栃木県においては、作新学院高校、黒羽高校、矢板高校、馬頭高校、那須高校などの活動が知られており、彼らの刊行した報告書は現在でも重要な基礎資料となっている。これに対し、國學院大学栃木高校考古学部は活動期間が短く、発掘調査報告書も刊行できなかったという点でその存在を知る人は少ない。

高校生による発掘から長い時間が過ぎ、当時の記録や出土遺物の一部は散逸してしまった点は、各地の「高校考古」の課題でもあり(市元2018)、全体像を明らかにすることはできない点は遺憾であるが、料の公開は学園としての責務でもり、本書の刊行によって少しでもその活動・資料が再評価され、活用が広がることを望みたい。

本書は、以上のような意義を有する平川遺跡の調査について、短期大学学生による活動の一環として、基礎資料の提示に重点を置いて作成した。そのため各課題に対する考察は不十分であるが、今後の研究・活用に資することができれば幸いである。

II 平川遺跡の立地と調査区

1. 平川遺跡の立地

平川遺跡は、栃木市大宮町字北堀ノ内・栃木市都賀町平川字大原の両地区にまたがって所在する〔第1図・第6図・第7図〕。標高は50.4mである（地理院地図による）。

栃木市は、栃木県中央部平地の西縁に位置し、概ね、山地によって北側は鹿沼市、西側は佐野市、思川によって北東～東側は壬生町・下野市・小山市、渡良瀬川によって南側は群馬県板倉町・埼玉県加須市、南西側は野木町・茨城県古河市と隔てられる（南西側は水田地帯の中に小山市との境がある）。

市域は、北西側の山地・丘陵地と、南西側の低地に大別される。栃木県土地分類基本調査（栃木県企画部土地対策課1984・1986・1987）によって概要を記すと以下ようになる〔第2図〕。

日光・足尾山地から伸びる山地は、北から谷倉山山地・三峰山山地・唐沢山山地・太平山山地からなり、谷倉山山地から赤津川、谷倉山山地と三峰山山地の間を永野川が流れる。赤津川はかつては巴波川に合流していたが、河川改修で現在は永野川に合流している。台地は、赤津川支流上流域に上位面（宝積寺面）、永野川を隔てた三峰山台地の東側に下位面（田原面）である吹上台地、さらに南方の大平・藤岡地区の市街地がある中位面（宝木面）である静和台地・藤岡台地がある。

永野川低地を除く低地の大部分は思川水系によって形成された思川低地である。現在の思川は下位面（田原面）である惣社台地と壬生町の下稲葉台地の間を流れているが、かつては惣社台地の西側を流れており、扇状地地形を形成している（河野重範氏教示）〔写真1〕。なお、土地分類基本調査「壬生」（栃木県企画部土地対策課1984）では、惣社台地の北東側の思川低地と南西側の黒川低地を区分しているが、本書では総称として思川低地とする。土地分類基本調査の地形分類図では旧河道がいくつも見られる。このうち、栃木市川原田町付近には湧水池沼が多く、近世以降、栃木市の繁栄を舟運で支えた一方、暴れ川としても知られ、近年でも浸水被害を起こした巴波川の源流となっている。

平川遺跡は、この川原田町のすぐ西側に位置する。栃木県・栃木市・国土地理院が提供しているハザードマップ「洪水浸水想定区域（想定最大規模）」は、最大浸水想定を0.5m以上と未満で区別しており、低地内の高低を確認することができる〔第3・4図〕。平川遺跡の範囲のうち、調査区の位置は浸水想定0.5m未満のエリアであるが、すぐ近くまで浸水想定0.5m以上の低地がみられることから、湧水の湧く低地に面した微高地と考えられる〔第4図〕。

2. 周辺の縄文時代遺跡

近隣の遺跡

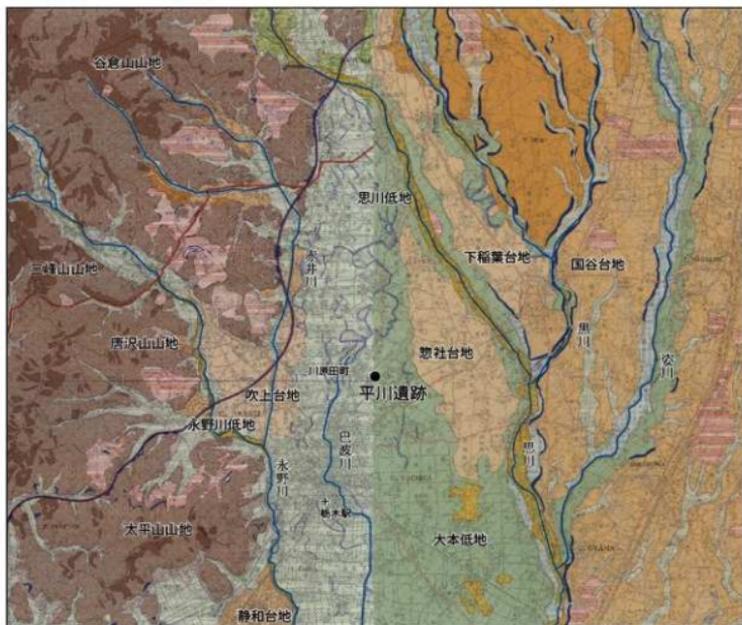
平川遺跡の立地と周辺遺跡について検討するため、〔第3図・第5図〕を作成した。第3図は、奈良文化財研究所が、各地の遺跡地図を統合して作成したWebサービス「文化財総覧 WebGIS」を用いて、上記のハザードマップデータと山地の傾斜量図を下図として縄文時代の遺跡（出典は「栃木県埋蔵文化財地図」：栃木県教育委員会1997）を表示させたものである。山地縁部、思川低地のうち標高が高い部分（浸水想定0.5m未満区域）、さらに栃木市域外だが、思川東岸の台地上に遺跡が分布することがわかる。



第1図 平川遺跡および同時期の主要遺跡の位置

S-1:400000

2015年発行電子地形図20万「宇都宮」



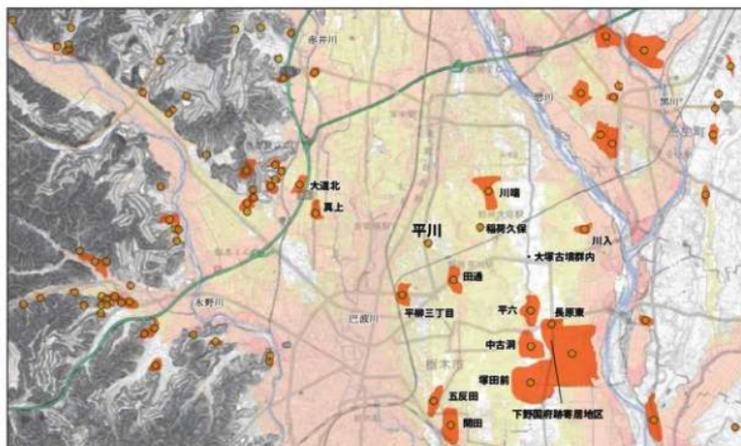
第2図 平川遺跡周辺の地形

1:140000

5万分1地形分類図(栃本県土地分類基本調査「栃木」「壬生」:栃本県企画部土地対策課1987・1984)に加筆



写真1 平川遺跡遠景 (2023年2月21日 白鳥昇一氏撮影)



第3図 平川遺跡の位置と周辺の遺跡

文化財総覧 WebGIS (<https://heritagemap.nahonken.go.jp/>) で作成
 帝國文時代遺跡+傾斜量図+ハザードマップ+地理院地図で設定

浸水想定区域

0～0.5m 未満

0.5～3.0m 未満

第4図 平川遺跡周辺の浸水想定区域

[栃木市防災ハザードマップ 2019年版]
<https://www.city.tochigi.lg.jp/soshiki/12/15881.html>



写真2 平川遺跡近景
北側を望む
(白鳥昇一氏撮影)

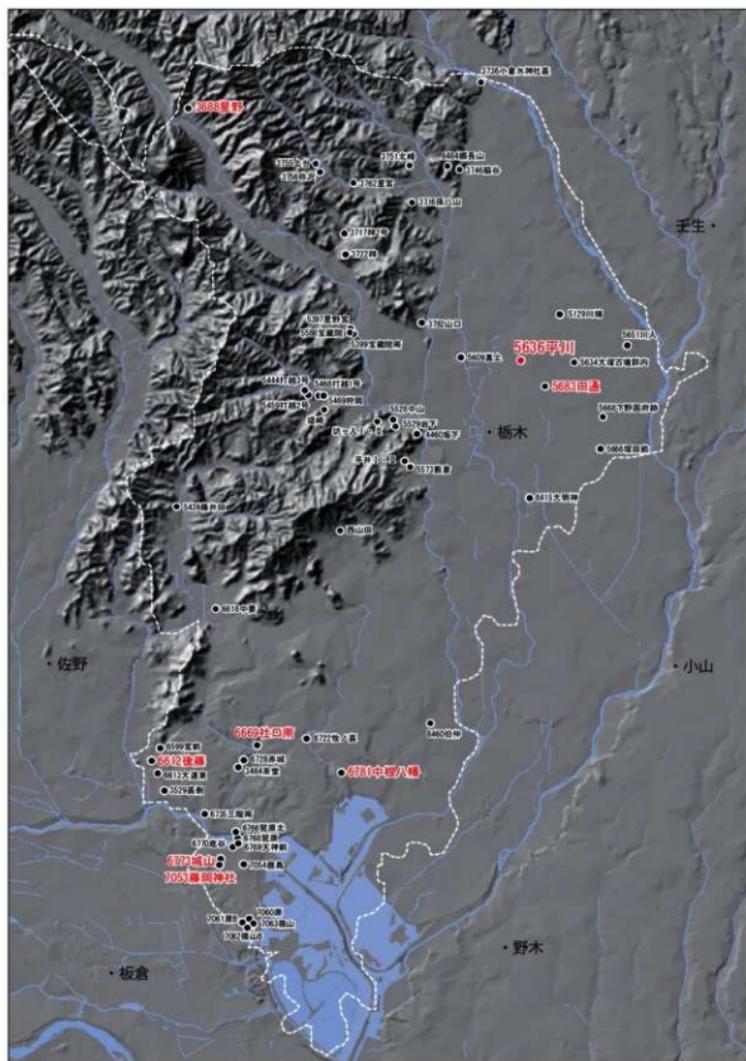


写真3 平川遺跡近景
南側を望む
右上は太平山
(白鳥昇一氏撮影)



写真4 平川遺跡近景
西側を望む
右上は筑波山
(白鳥昇一氏撮影)





第5図 栃木市内の縄文時代中期遺跡

S-1:150000

『栃木県埋蔵文化財地図』・『栃木市遺跡分布地図』・各自治体史で「縄文中期」とされたものを抽出 ※赤字は遺構検出遺跡
 下図は地理院地図 Vector: 水色+地形+陰影起伏図

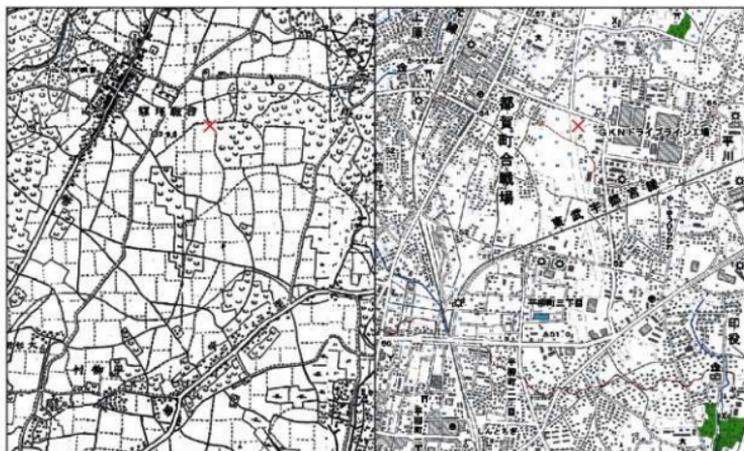
はじめに、近隣の縄文時代遺跡について確認する〔第3図〕。いずれも平川遺跡の東から南にかけて所在する。このうち遺構が検出されたのは田通遺跡と下野国府跡寄居地区のみである。田通遺跡からは、前期以前と想定される陥し穴1基、中期後葉（加曾利EⅢ式）の住居跡、後期初頭（称名寺式）の埋設土器が検出され、早期（条痕文）・前期中葉（黒浜式・浮島I式）・前期末葉（十三菩提式）・中期初頭（五領ヶ台式）・中期後葉（加曾利EⅡ～Ⅳ式）の土器、石器（石鏃・石錐・分銅形石斧・石皿・凹石など）が出土している。下野国府跡寄居地区では中期後葉（加曾利EⅠ式期）の住居跡、後期中葉（加曾利B1式）の土坑が検出されている。大塚古墳群内からは堀之内式を中心に、中期（阿玉台式・加曾利E式）・後期（堀之内式・加曾利B式）・晩期（大洞BC式）の土器が出土している。平柳三丁目遺跡では後期前葉（堀之内1式）の土器と切目石錘が採集され、上野（1989）によって図化されている。長原東遺跡で堀之内1式（上野1989）、下野国府跡（大房地遺跡）で加曾利B2式の土器が出土している（市史）。川端遺跡、川入遺跡、塚田前遺跡では詳細不明なものの中期の土器が採集されており、他に時期不明の縄文遺跡として、平六遺跡、中古洞遺跡がある。

このうち、低地部に位置するのは、田通遺跡、平柳三丁目遺跡、平六遺跡、中古洞遺跡である。長原東遺跡や下野国府跡も低地遺跡とされ（上野1989）、遺跡地帯でも沖積地とされているが、前述の地形区分上では惣社台地の縁辺に位置する。このほか、平川遺跡の西、河川改修後の赤井川東岸に大道北遺跡、真上遺跡（中期）、南方の巴波川東岸に岡田遺跡・五反田遺跡などがある。いずれの場所も浸水想定0.5m未満である。なお、旧大平町大明神遺跡は遺跡地図では台地上とされている。

栃木市内の中期遺跡

縄文時代は時間的に長く、時期ごとに検討することが必要である。そこで、『栃木市遺跡地図』（栃木市教育委員会2015）、『栃木県埋蔵文化財地図』および自治体史（栃木県1979、栃木市1982、大平町教育委員会1982、都賀町1989、藤岡町2003、西方町2011）から中期と判明している遺跡を抽出したのが第5図である。なお、『栃木市遺跡分布地図』は、平成の大合併によって拡大した栃木市域を対象に、新たに踏査が行われたもので、小林青樹元教授をはじめとする國學院大學栃木短期大学の学生・卒業生・教職員、國學院大學の学生が参加して実施されたものである。1975年に刊行された旧版の『栃木県遺跡地図』の旧栃木市域についても早川泉氏の指導の下、國學院大學栃木高校考古学部が踏査を行ったという（芹沢清八氏教示）。なお、図示していないが、市外では、壬生町・小山市・野木町・茨城県古河市にかけて思川東岸の台地上に遺跡が連なって立地している。また、藤岡台地の板倉町側や、佐野市の山裾にも中期遺跡が立地する。

市内の中期遺跡のうち、遺構が確認された遺跡は少ない。星野遺跡は旧石器時代の遺跡として著名だが、第1地点は中期後葉の遺跡であり住居7軒が検出されている。社口南遺跡では住居6軒が検出されている。中根八幡遺跡では、後期以降の「環状盛土遺構」出現以前の土器も多数出土しており、調査範囲が狭く堅穴住居とは確定できないものの、B区から中期と想定される柱穴群、C区からも土坑の可能性のある落ち込みや土器集中地点などを検出している。城山遺跡では後葉の土坑が検出されている。藤岡神社遺跡では105軒の住居が検出されており、前期7軒、中期前半4軒、後期24軒、晩期2軒を除く大半が中期後葉と考えられる。このほか、小倉水神社裏遺跡・郷長山遺跡・脇谷遺跡・伯仲遺跡・篠山貝塚などの発掘で中期土器が出土している。



第6図 平川遺跡の位置

左：1886年発行2.5万分1迅速測図「栃木町・壬生」（複製版：地図資料編纂会 1989）
右：2013年発行2.5万分1地形図「栃木」（電子版）

S:1:25000

3. 調査区の位置と周囲の確認調査

前述のように、平川遺跡は、栃本市大宮町字北堀ノ内・栃本市都賀町平川字大原の両地区にまたがって所在する。1969年の調査地点は、栃本市側であり、「北堀の内遺跡」と称してきたため、近年まで本学圏ではこの名称を用いてきた。しかし、『栃本市史』（日向野1982）では、本発掘に言及しながらも既に「平川遺跡」とされ、『栃本市遺跡分布地図』（栃本市教育委員会2015）に引き継がれている。本書では現行の遺跡名に従い、平川遺跡とする。

1969年調査区の位置については、國學院大學栃木学園参考館に残されていた略地図および後掲の調査時写真によって概ね位置を把握していたが、近年、周囲で確認調査が行われ、その中で、旧トレンチの位置が特定されている〔第7図〕。

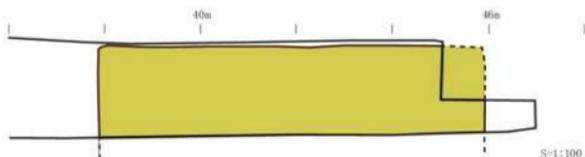
まず、2006年に栃木県教育委員会が小山栃木都市計画道路 3・3号小山栃木都賀線（以下、バイパス）に先立つ立会調査を行った。その後、2020年にバイパス西側、2021年にバイパス東側に店舗が建設されるのに先立ち栃木市教育委員会によって確認調査が行われた。このうち、2021年の調査では溝状遺構1本が検出されたものの遺物は発見されておらず、工事が行われている。

栃木市教育委員会より提供された2020年の調査成果を要約すると以下のとおりである。

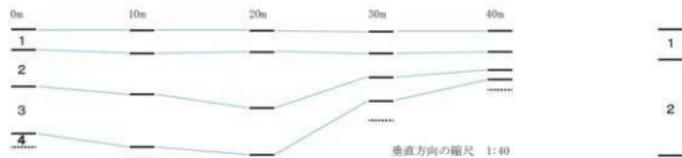
- ・建物範囲を対象に5本のトレンチ（北から1～5トレンチ）を設定し、最大で現地地表下2.20mまで掘削した。
- ・基本土層は全7層で、Ⅰ層（表土・旧耕作土）、Ⅱ層（攪拌された黒ボク土）、Ⅲ層（鈍い黄褐色シルト、黒褐色シルト）の遺物を含む再堆積層、Ⅳ層（基盤層）に大別される。
- ・全体として西、南下がりの堆積層で、基盤層は北側へ高くなる。



写真5 平川遺跡 2020年確認調査4トレンチ (栃木市教育委員会提供)
北から 奥の黒い部分が1969年トレンチ



4トレンチ内旧トレンチ検出状況 (左側が北)



4トレンチ内土層堆積模式図 (左側が北)

1. 表土
2. 旧耕作土
3. 黒がグライ化 黒色 (2.5Y2/1) 粗砂混じりシルト 小礫 1cm, ローム粒子少量含む, しまり強い, 粘性あり
一遺構確認区
4. 再堆積層《遺物包含層》 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂混じりシルト しまり弱い, 粘性あり
5. 再堆積層《遺物包含層》 黒褐色 (7.5YR 2/2.9) 粘土混じりシルト しまり弱い, 粘性あり
6. 砂利層 (2トレンチの一部で3層下に検出)
7. 基盤層 褐色 (10YR4/4) 粘土混じりシルト, しまり弱い, 粘性あり

5トレンチ内土層堆積模式図

第8図 平川遺跡 2020年確認調査時の旧トレンチ確認状況と土層堆積 (栃木市教育委員会図をトレース)



写真6 平川遺跡 2020年確認調査3トレンチ出土縄文土器（栃木市教育委員会提供）

- ・遺構はIV層上面から掘り込まれる。漸移層が無く削平面である。
- ・IV層上面で検出した遺構は深さが10～20cmで浅い。
- ・堅穴建物5軒、土坑22基、集石遺構6基、溝1条を確認した。溝はII層上面から掘り込まれることから後世の区画溝と考える。
- ・遺構内外から縄文時代中期から後期の土器、石器が出土した。
- ・聞き取りによれば1970年代に南端で水道引込の際に調査が行われ、堅穴建物が確認されたとの情報があったが、本調査により同建物の位置が判明した。
- ・本調査が必要との判断となったが、計画変更（盛土）を行い着工した。

本書では、提供された原因をもとに、4トレンチ（10m間隔）・5トレンチの土層堆積模式図、旧トレンチ部分の平面図をトレースして掲載し、また3トレンチから出土した大形破片の写真を掲載した〔第8図・写真5・6〕。

なお、平川遺跡の北東には、平川城址（No.5635：室町）、南西には薬師堂遺跡（No.5618：奈良・平安）が所在する〔第4図〕。

Ⅲ 調査・整理の経緯と方法

1. 調査の経緯と調査の方法

平川遺跡は、國學院大學栃木高等学校に早川泉氏が赴任し、考古学部が発足して2年目の1969年に発掘調査が行われた。当時の高等学校校報〔第9回〕や本書冒頭の早川氏の寄稿によれば、考古学部は「栃木市内における先史時代の解明」をテーマに、市内各地の遺跡踏査を行い、分布図を作成していたという。現在、國學院大學栃木学園参考館が所蔵する考古学部からの移管資料の中にも、市内の地名を記した打製石斧などが残されている。

こうした中、部員が発見し、部員の家の所有地でもあった平川遺跡で発掘調査が行われることになったらしい。『日本考古学年報』の記述は以下のとおりである（早川1981）。

- ① 栃木市大宮町北堀の内（壬生24.5 × 127cm） ② 1970年7月24日～8月4日（10日間） ③ 國學院大學栃木高等学校 ④ 川崎義雄 ⑤ 集落跡 ⑥ 500㎡ ⑦ 遺跡西部64㎡ ⑧ 縄文時代（中期）
⑨ 小倉川西岸台地 標高50m ⑩ 水田・畑地 ⑪ 堅穴状遺構1 ⑫ 加曾利EⅠ式土器・打製石斧・石鏃 ⑬ 径4m・深さ30cm程の円形の堅穴遺構から、完形土器が数個体出土している。（早川泉）

川崎義雄氏は日本考古学協会会員で、当時國學院大學久我山高等学校で同校考古学部を指導していた。栃木高校の考古学部員も同校の調査に参加しており、その縁で担当者として依頼したらしい（川崎氏教示）。調査期日は調査直後の校報で、1969年7月21日～30日の10日間とされるので、年報の方が誤りである。小倉川は黒川と合流するより上の思川を指す。遺構の大きさについてはIVで検討する。調査後、注記・接合・復元が行われ、文化祭などで展示されたが（芹沢清八氏教示、写真28）、整理がどこまで進んだかは不明である。その後、考古学部は1981年度には歴史部となり、考古資料は1989年4月に他の遺跡の資料とともに國學院大學栃木学園参考館に移管された。

國學院大學栃木学園参考館には、出土遺物とともにカラーリヴァーサルフィルム137枚が残されていた。この写真には、平板測量の様子も写っているが、図面・台帳類は残されていない。以下、この写真をもとに調査の様子を復元してみたい。なお、順番は推測であり、細かい前後関係は不明である。



第9回 平川遺跡発掘調査の紹介記事（國學院大學栃木高等学校校報87号：1969年9月30日）

写真7

北餅（合戦場駅方面）より調査隊が遺跡に入る。



写真8

調査区設定準備。奥ではメジャーを持って調査範囲を測っている。誰も帽子をしていないので、涼しい日であったようだ。



写真9

高校のテント内に機材を置く。自転車で通った生徒もいるらしい。オレンジ色の手箕には「国学院 考古学」の文字。





写真10
調査区の草刈りならぬジャガイモほり。調査は収穫を待って行われたか。麦わら帽子のほか、学生帽が見える。後ろに工場のような建物が見えるので、北西方向から撮影したもの。写真8の個人宅は右側に位置する。



写真11
メジャーを用い、木杭を打ち込んで、そこに縄を貼ってグリッドを設定している。



写真12
調査開始。当時一般的な市松文様のように1拵ずらしながら、エンピ(スコップ)で掘り始めている。上半身裸の生徒も多くなってきた。

写真 13

市松状の掘削がある程度進んだ状況。グリッドは、南北（写真では左右）×東西に4×5で設定している。



写真 14

写真2列目、中央の2人が入るグリッドは腰のあたりまで掘り下げています。左側のグリッドは、当初掘り残していた部分で、新たに膝あたりまで掘り下げた。これに対し、写真1列目の左右のグリッドは手つかずのままである。



写真 15・16

右：南北方向に4グリッド分が確認できる。

左：カメラには「白黒スナップ」の荷札がついている。残念ながら白黒写真は現存しない。足元のグリッドには「C-3」の荷札が着いている。





写真 17

奥のグリッドは、2グリッド分をぶち抜いており、左奥では堅穴状遺構の掘り下げが始まっている。右奥には、堅穴の遺構検出の線が見える。



写真 18

具体的な位置は不明だが、堅穴状遺構の範囲を掘り下げている。



写真 19

堅穴状遺構を囲っていた壁がエンビで崩されている。エンビを持つのは、須藤光三教諭。

写真 20

床面近くから大形の土器破片が見つかり、竹ペラで慎重に掘り出している。右は早川氏。



写真 21

移植ゴテ・竹ペラを傍らに置き、刷毛で細かい部分の土を落とす。



写真 22

奥の遺構外には一輪車が入り、排土を改修している。





写真23

調査区北側に平板を設置し、測量。しかし、この図面は現存しない。



写真24

全体が見えてきたら、刷毛に水を付けて洗う。



写真25

出土状況のアップの写真撮影。撮り終えたものから、取り上げ、ビニル袋に入れる。

写真 26

奥ではビニール袋を用意し、土器の取り上げ準備。手前では水で洗っている。周囲の床面は綺麗なので、引いた写真は撮影済みと思われる。この段階では皆、裸足である。



写真 27

皆で花火を楽しむ。打ち上げだろうか。



写真 28

国学院祭（文化祭）での展示風景。左：手前に実験製作土器、その奥に土器128など、さらに奥には石器が展示されている（1973年度卒業アルバム）。右：土器16ほかが展示されている（1975年度卒業アルバム）。

2. 整理の経緯と方法

2020年度

國學院大學栃木短期大学日本文化学科日本史フィールドでは、栃木市中根八幡遺跡において考古学実習発掘調査を継続して実施し、また國學院大學栃木学園参考館にて博物館館務実習を行ってきた。しかし、2019年度に発生したCOVID-19の感染拡大防止の観点から、登校・課外活動・校外実習に制限がかかることとなった。そこで、2020年度開始時に「考古学演習Ⅰ」のために、参考館所蔵土器や土偶を3D化し、公開した。さらに、博物館実習の一環として、館蔵資料をテーマごとに集め3Dデータと解説を付した「こくとち360度まるみえミュージアム」を作成・公開した（中村2021・2022）。こうした中で、考古学研究会・博物館学研究会が中根八幡遺跡を主なフィールドとして実施してきた栃木県大学地域連携支援事業「文化交流の交差点「栃木」の起源を縄文時代に探るⅡ」の活動に、同じ市内の平川遺跡も対象とすることとし、研究会活動ならびに考古学実習（「考古学フィールドワークⅠ・Ⅱ」、「考古学演習Ⅰ・Ⅱ」）の中で、報告書刊行に向けた整理作業を行うこととしたのである。

土器片については、まず注記ごとに仕分けし、バリエーションを考慮しながら掲載資料を抽出した。調査区自体の状況が不明なこと、全ての遺物に注記が付されている訳ではなかったこと、また接合が剥がれたり注記自体が汚れたりして注記内容を確認できない資料も少なくなかったことなどから、グリッド別・型式別などの集計は断念した。

また、カラーリヴァーサルフィルムを1200dpiでスキャンし、Adobe Photoshopで自動カラー補正をかけた。時系列は失われており、表裏が不明なものも多かったため、文字が写っているもの、腕時計の位置などの写真を規準とし、建物や遺物配置から判断した。

石器については、大工原豊（当時、國學院大學兼任講師）に実測・計測を委託した。

2021年度

土器片の採拓、断面実測、拓本のデジタル画像化、断面のデジタルトレースを順次進めた。春休みには接合・修復や、一部の立体的な把手類の平面実測なども実施した。

復元個体については、3D化し、Web公開するとともに、中村が研究代表者をつとめる科学研究において縄文土器を用いたワークショップに使用するため、オルソ画像をもとにデジタルトレースを井草文化財研究所に委託した。なお、3Dデータは多視点の写真を撮影し、パソコンソフト上3Dデータ化するSfM/MVSと呼ばれる方法で、Agisoft Metashapeを用いて作成した。さらに、Cloudcompareで正面位置を決めてオルソ画像を生成した。また、一部の土器については、Gigameshを用いて展開画像データを作成した。撮影を学生、データ処理を中村が行った。

2022年度

前年度に引き続き、大形破片や立体的な突起類の3D化を行い、デジタルトレースを委託した。

その後、土器の分類や写真の整理を進める中で、未整理の復元個体、土器破片、石器が存在することが分かり、3D化、拓本・実測などを冬～春にかけて追加で行った。また、土器破片の撮影・画像処理、図版編集を進めた。土器突起・底部や石器の図化は、長焦点法による写真をもとにした方法（大工原2020）を用いた。これらの撮影・拓本・土器図化は在学生のほか、卒業生有志の協力を得て実施した。なお、研究会顧問・授業担当者の中村が転出し、新たに大工原が着任したが、平川遺跡の報告書編集は引き続き中村が担当した。



写真 29 土器の拓本作成 (2020 年度)



写真 30 土器の拓本作成 (2021 年度)

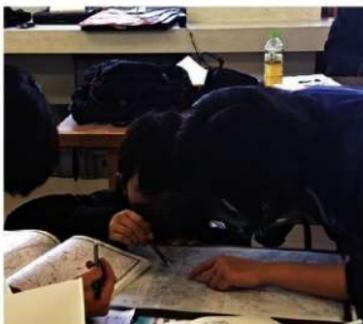


写真 31 周辺遺跡位置図の作成 (2022 年度)



写真 32 写真データの加工 (2022 年度)



写真 33 土器の写真撮影 (2022 年度)



写真 34 整理した資料の展示準備 (2022 年度)

Ⅳ 竪穴状遺構と遺物出土状況

1. 竪穴状遺構

検出された遺構は、長径6m×短径5m（校報）、径4m・深さ30cm（日本考古学年報）の竪穴で、柱穴1本が検出されている（校報）ものの、炉が検出されなかったことから「竪穴状遺構」として報告されている。

大きさの記述が不統一だが、写真16の脚の長さや写真35の2mポールから、1グリッドが2m四方であり、最終的な調査区は東西方向に2グリッド＝4m、南北方向に4グリッド＝8mと判断できる。8mは2020年の確認調査で検出された旧トレンチの長さとも一致する〔第8図〕。南北に1m程度の余裕があることから、竪穴状遺構のサイズは長径6mとする校報の記載の方が実態に近いものと思われる。これに基づき調査面積は32㎡とする。柱穴の記載があったが、写真では確認できなかった。

写真35はもっとも全体像が把握できる写真である。写真左側（東側）が平坦なのに対し、右側（西側）は傾斜している。立ち上がりは緩やかである。この時点で土器はほぼ取り上げられており、おそらく礎を図化していると思われるが、これら床面直上の礎についての詳細は不明である。

注記によれば、土層は1～3層および床（床直）の4種が認識されている。写真36をはじめいくつかの写真に壁面の分層が写っており、①層：表土層、②層：黒褐色土、③層：黄褐色土を確認できる。竪穴状遺構は3層内で検出されている。おそらく、2020年の栃木市教育委員会確認調査での、1・2層が①層、3層が②層、4層が③層に対応すると考えられる。



写真35 竪穴状遺構調査風景（北から）

2. 注記と遺物出土状況

遺物に付された注記は、基本的に「H-A3-3住」のような形式をとる。このうち冒頭の「H」は堀の内を指している。続く「A3」はグリッド名である。竪穴状遺構から出土した土器の配置と注記を検討した結果、東側からA～E、北側から1～4と振ったものと推測した。竪穴状遺構のトレンチは、このうちA1～B4ということになる。

「3住」の部分、「3」や「3層」などもあり、層位と考えられる。前述の③層である。また、単に「住」とするもの、「3住床直」「床直」「住直」「直」「直上」など、必ずしも統一されていないが、床直出土を示す注記も多く、「3住」を含めて出土品の大半が竪穴状遺構覆土出土と判断できる。一方、「1」や「2」もあるが、数は少ない。このほか、「KH」や「北堀の内」などもある。

床面近くの大形破片は出土状況写真が撮られており〔写真43～58〕、それぞれをA群～M群とした。これらが複数まとめて写っている写真〔写真37～42〕と対比させ、それぞれのおよその位置関係を推測した〔第10図〕。しかし、各群の土器と対応可能なものは半数程度であり、それ以外は残念ながら散逸したと考えられる。A群・D群・K群など遺構外縁に近い位置の土器は数センチ程度浮いた状態で写っており、これら中心から離れた位置の遺物は散漫である。これに対し、中央部分は概ね床面直上に、大形の土器片や礫が密集して出土している。なお、石鏝は現存しないが、校報によれば三十数個が散乱していたとされ、1点の出土時の写真が残されている〔写真60〕。



写真36 竪穴状遺構調査風景（南西から）



写真 37



写真 38・39



写真 40

写真 41



写真 42



第 10 図
土器出土位置と写真撮影方向
(写真をもとに復元)

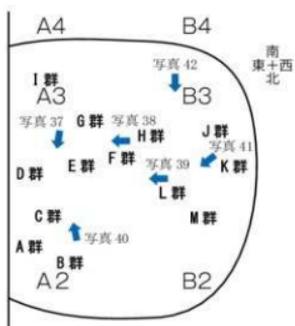




写真 43 A群土器
(土器 31)



写真 44 B群土器
(土器 1)



写真 45 C群土器
(所在不明)

写真 46 C群土器2

写真 47 D群土器
(土器 3)写真 48 D群土器
(土器 3)



写真 49 E・F 群土器
(写真 38 を拡大)
(E: 土器 124?)



写真 50 E～G 群土器
(写真 40 を拡大)



写真 51 G 群土器
(土器 21)

写真 52 H群土器
(土器 126)



写真 53 I群土器
(土器 127)



写真 54 J群土器
(所在不明)





写真55 K群土器
(土器 128)



写真56 M・L・H群



写真57 M・L群土器
(写真41を拡大)
土器32以外の多くは所在不明

写真 58 M群土器
(所在不明)



写真 59 位置不明
(上方に土器 24)



写真 60 石炭
(所在不明)



V 縄文土器

1. 平川遺跡の縄文土器の概要

関東・中部地方における縄文時代中期の土器研究の課題の1つが中期中葉から後葉の土器様式の大変動・再編である。中葉の土器様式（阿玉台式・勝坂式など）と後葉の土器様式（加曾利E式、曾利式など）はそれぞれ、定型的で安定した土器様式であるが、両者の移行期には、様々な系統差が顕在化した土器群が出現し、互いに影響を与えながら多様な土器群が出現する。その一例が、「中峠式」である（下総考古学研究会1976）。多様な土器群の年代的順序を整理した上で、安定期には見出すことができない細かい地域間・系統間の関係性を伺うことができる可能性がある。栃木県では、東北系・新潟系・東関東系の土器群の接触地域である那須地域を中心とした県北部の遺跡に複数の土器を収納した袋状土坑が多数構築されており、その組み合わせを分析することで、編年・系統研究が進展してきた（海老原1979・1981ほか、芹沢1987、塚本1997・2009、塚原1994、後藤1996、合田2000、猪瀬2006、中村2000）。また、これらの成果をふまえ、主に那珂川流域（茨城県を含む）における加曾利EⅠ式古段階の小地域間の差について、塚本師也（2014～2017）が検討を続けている。

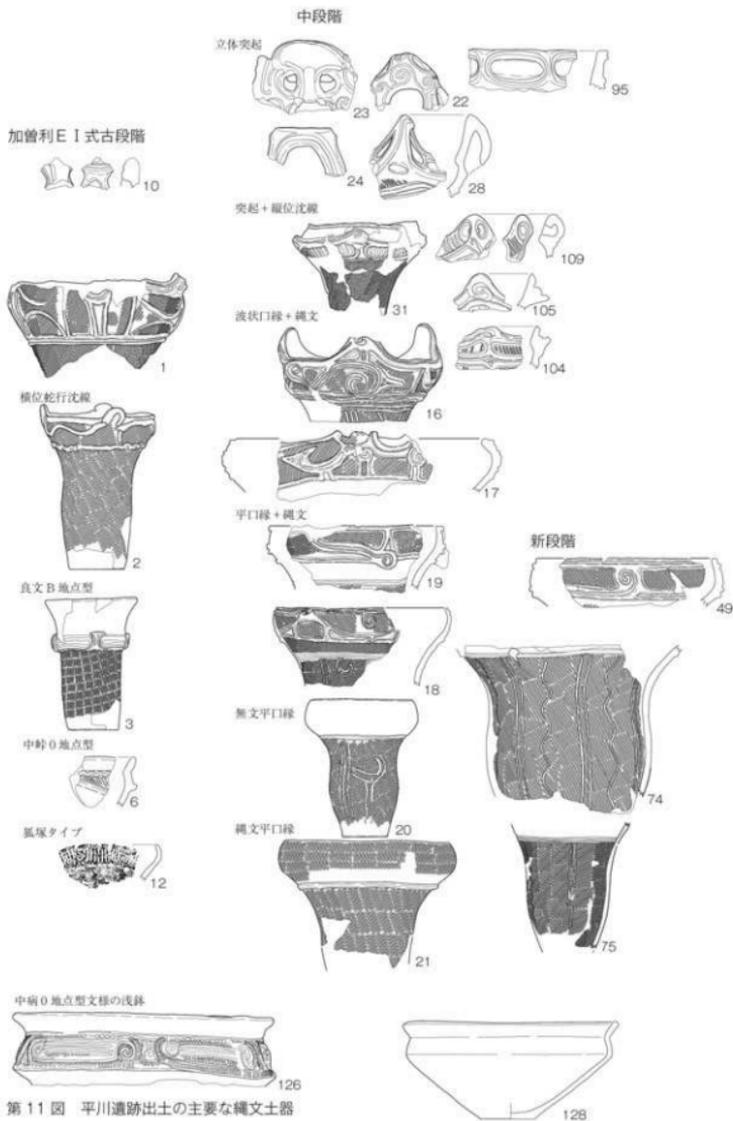
本書では、主に、塚本（1997・2019）による系統分類および加曾利EⅠ式3段階区分に沿って分類・配列した。また、県南部の小山市寺野東遺跡、上三川町島田遺跡、野木町松原北遺跡を検討した江原英（1996・2006）の研究も参照した。塚本氏・江原氏をはじめ、栃木県における加曾利EⅠ式3細分はおおむね埼玉編年（谷井ほか1982）に沿っている。近年の新地平編年（縄文中期集落研究グループ1995）、総覧縄文土器編年（細田2008）との詳細な対比は今後の課題とされるが、概ね、古段階-新地平9c・10a期（塚本2004）- 総覧Ⅰ最古段階-古段階、中段階 - 新地平10b・10c期-総覧Ⅰ新-II古、新段階 - 新地平11期-II古-新となる。

本書で報告する土器は、概ね1基の堅穴状遺構床直-覆土からの出土と見てよい。床直とされる中にも古段階（1・2）、新段階（49）を含むので編年論的な一括資料とは言えないが、量的には中段階を中心としている。第11図に系統のバリエーションを考慮して代表例を抽出した。

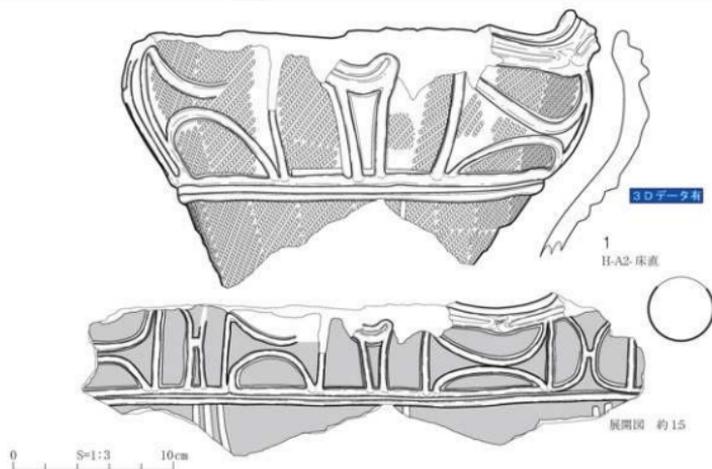
加曾利E式以前は、阿玉台式の破片（4）を1点確認したのみである。古段階は、良文B地点型（3）や中峠0地点型（6）、口縁部に蛇行隆帯をもつもの（2）などがあるが、当時の組み合わせが全て遺存しているかは分からない。浅鉢では中峠0地点型の文様をもったものがある（126・127）。

中段階は様々な立体突起、波状口縁/平口縁、縄文施文/沈線充墳、それぞれの組み合わせが見られる。下総台地に多い沈線充墳のもの（31・109）、南関東で一般化する平口縁+縄文+頸部無文帯をもつもの（18・19）、口唇部に立体的な渦巻文をもつもの（16・104・105）や剣先状文を持つもの（16・17）など東北の大大木式の影響を強くうけた特徴をもつもの、口縁部にモチーフを描かず無文なし縄文のみとするもの（20・21）などがある。

新段階とははっきり判断できる破片は少ないが、平縁で、口縁部区画が方形化した典型例（49）がみられる。このほか、中段階-新段階と考えられる、頸部無文帯をもつもの、縄文地に2～3状の直線あるいは蛇行沈線を垂下させるもの（74・75）などの加曾利E式土器および、これに併行する大大木8b式の文様を描くもの、浅鉢（128）、有孔罅付土器、底部破片などがある。

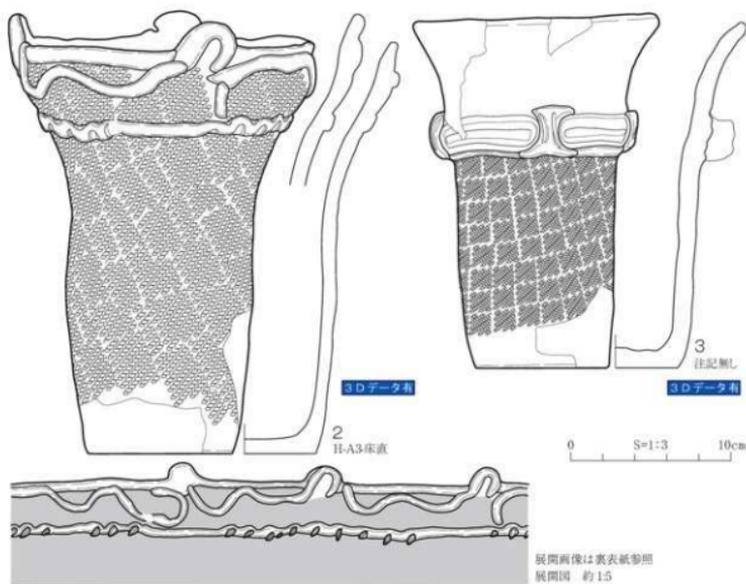


第 11 図 平川遺跡出土の主要な縄文土器



2. 加曾利E I式以前～古段階の土器

1は、縄文地に1本の隆帯で垂直および上下または左右に開く背中合わせの弧線文を左右対称に配置する。胴部には3条1組の沈線が垂下する。塚本（1997）が加曾利E I式古段階に位置付けた御城田遺跡 176号土坑に類似がある。





2は全面地縄文に蛇行ないし交互刺突を有する隆帯を巡らせる。

3は朝顔形の器形で、口縁部～胴上半部が無文、胴下半に縄文を巡らせる。その境部分に3条の隆帯をめぐらせ、3単位の突起を配する。「良文B地点型深鉢」（下総考古学研究会2011）である。

4は阿玉台式のV字形の隆帯文をもつ土器である。

5～9は「中峠0地点型深鉢」（下総考古学研究会1998）で、6・7には交互刺突文、8・9には隆帯上に刻みが施される。

10は突起部分。表側は剥離が著しいが、縦位に隆帯が張り付けられていたと思われる。

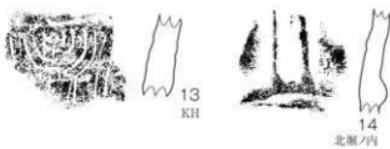
11は口縁部に横位の狭く深い沈線を巡らせ、屈曲部直上から胴部にかけて縦位の沈線を密に施す。

12は口縁に縦位の沈線を密に巡らせ、要所に渦巻文を配するもの。埼玉県宿下遺跡に類例があり、徳留彰紀（2017）は西南関東の勝坂式系の「狐塚タイプ」に位置付けている。

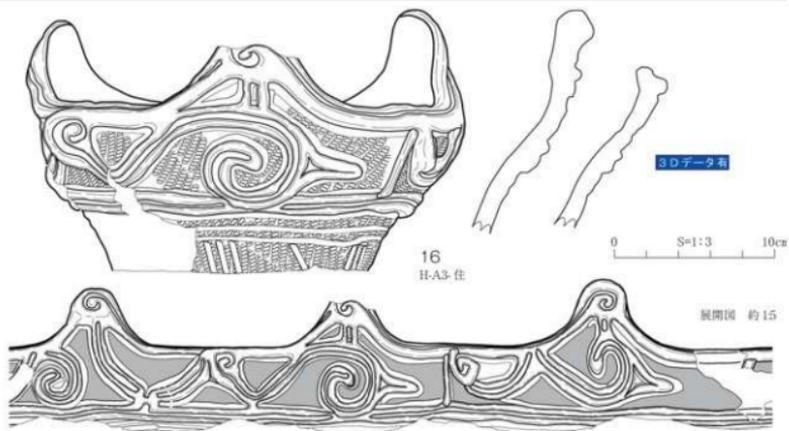
13は縦位の沈線の間に二重のU字状のモチーフ配する胴部破片。

14は尖った隆帯をもつ胴部破片。

15は横位の隆帯をめぐらせ、その上下に横位の沈線を描く胴部破片。



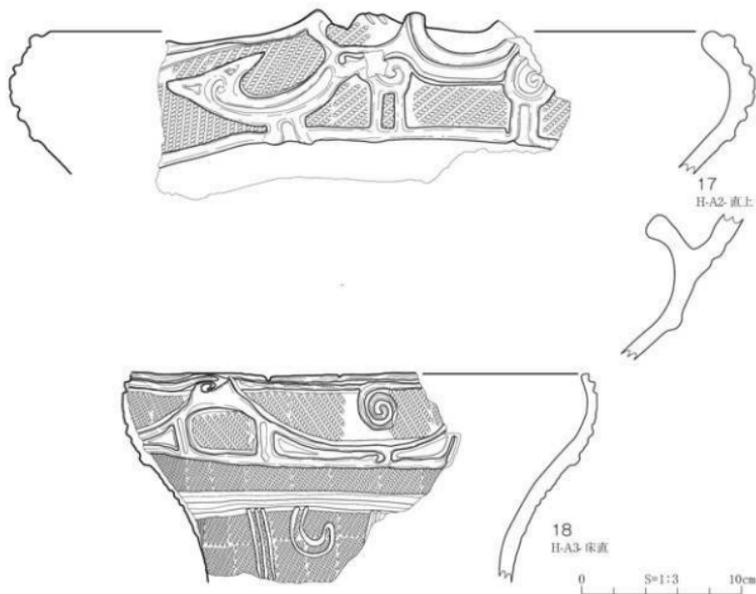
0 S=1:3 10cm



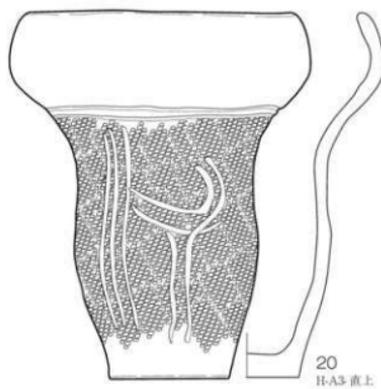
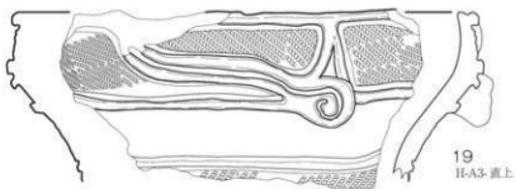
3. 加曾利E I 式中段階の土器

16は波状口縁で、口縁部文様帯に縄文を施し、両脇を沈線に沿う二重の隆帯で渦巻文+剣先文を描くもの。波頂部にも渦巻を配する。横位の隆帯で区画された頸部以下にも縄文を施し、遺存状況が悪いが3条1組の沈線を垂下させている。

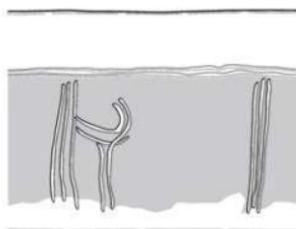
17は16に近い文様を持つが、頸部は無文である。写真45・46の土器と同一個体の可能性がある。



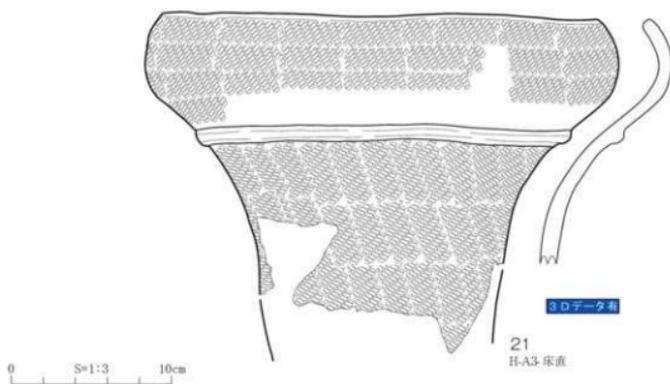




3Dデータ有



展開図 約1:5



3Dデータ有

0 S=1:3 10cm



18は縄文を施す平口縁で、口縁上には突出しない上向きの立体渦巻装飾を持つ。頸部に3条の沈線を巡らし、3条1組の直線沈線を垂下させるほか、「し」条のモチーフを配する。

19は縄文を施す平口縁で、頸部無文帯に張り出して渦巻文をつくり出している。

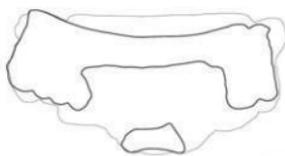
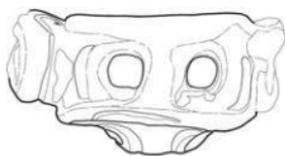
20は無文の平口縁で、頸部に2条の沈線を巡らせ、その下に3条1組の直行する沈線を垂下させるが、図の正面にはさらにモチーフを描く。

21は口縁部上半と胴部に縄文を施し、口縁部下半を無文、頸部に隆帯を巡らせる。特定のモチーフは描かれない。

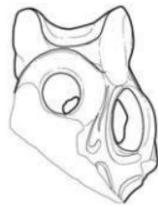
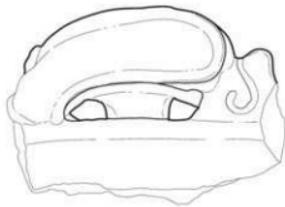
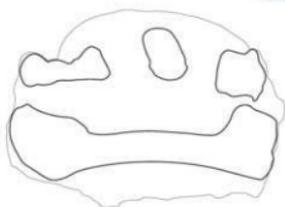
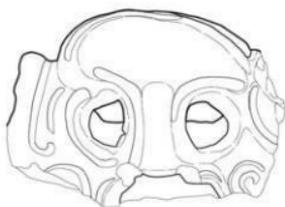
22～27は平口縁に付される立体突起である。22は全体として三角形を呈し、各所に浅い沈線で渦巻文を施す。内面側は無文である。



3D 画像



3D データ



23

H-B23 作内

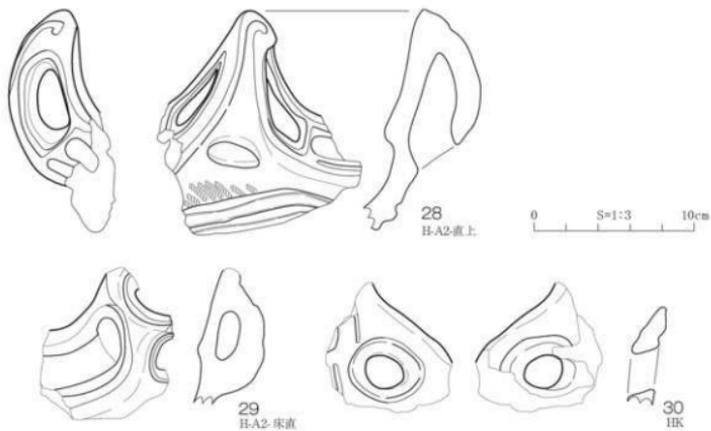
0 S=1:3 10cm



23は内屈する口縁に付された大形突起で、那珂川町三輪仲町遺跡SK86の複弧文土器に類例がある。
24～26は箱状方形の突起で、形状に沿った沈線を付すが、26には渦巻文も付される。県北部では複弧文に付される例が多い。

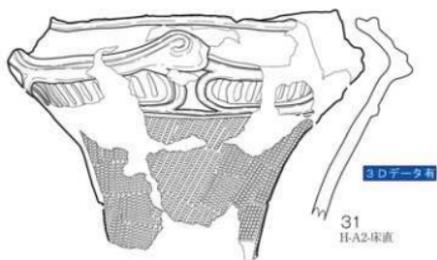
27は沈線を充填する小形の橋状突起である。

28～30は波状口縁波頂部の立体突起である。28の口縁部下には沈線を沿わせた隆帯が巡っている。





左側面



31
H-A2-床直



32
H-B3-直



33
KH

0 S=1:3 10cm

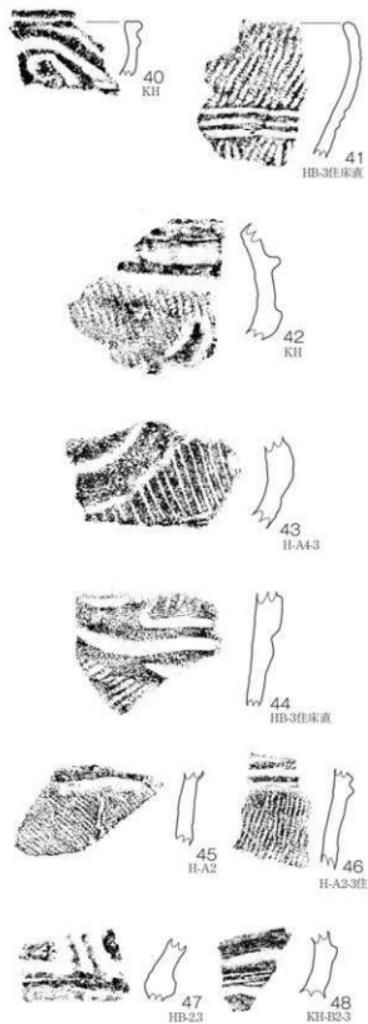


31～33は口唇部直下が無文、その先に文様を施す一群。32は無文部が溝状に凹む大木式のもの、31・33は文様帯が下がっているもの。31は図正面に突出する渦巻文があり、そこから左側に隆帯が伸び、左側面では口縁部との間に2本の縦位のブリッジを伴う27のような突起が位置していた可能性が高い。渦巻文下の楕円区画内には縦位の沈線を充填する。32も頂部に突出する渦巻を持ち、頸部に沈線を沿わせた隆帯による渦巻文とおそらく剣先文の先が描かれる。

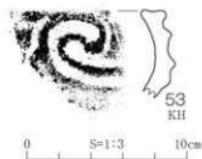
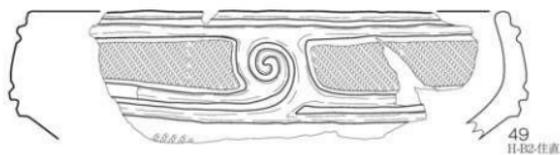
34は平板な突起で、孔に沿って表裏に1条の沈線を巡らせる。35は中空突起の手前側の先端部分の破片である。上面は孔に沿って1条の沈線、側面には渦巻文が描かれる。36は突出する渦巻文。

37～40・42は縄文を施す平口縁に沈線を沿わせた2条の隆帯で渦巻文を描くもの。37は現存しないL群〔写真56・57〕と同類である。

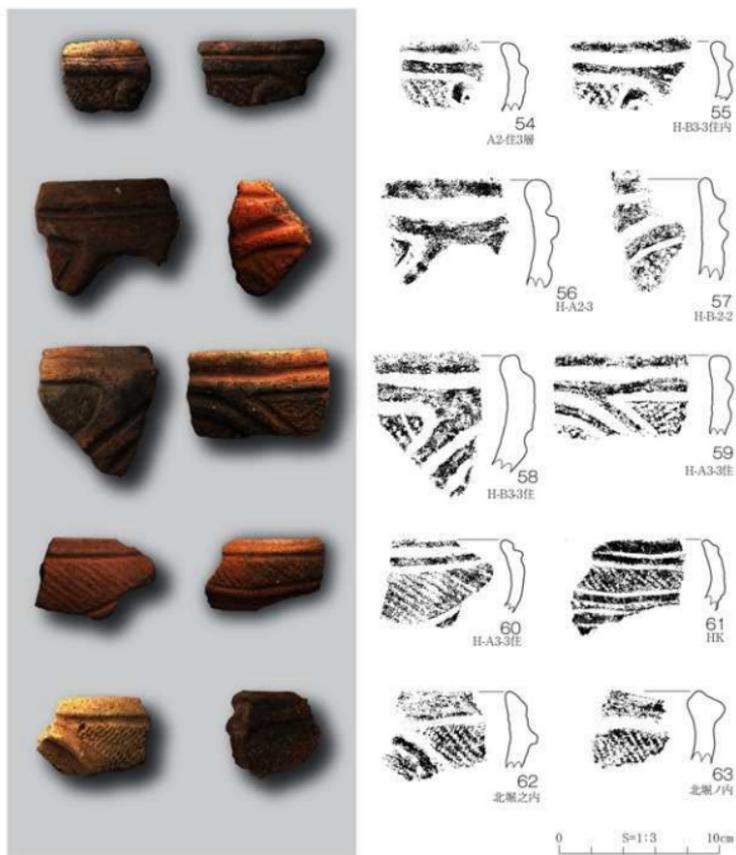
41は20・21のような口縁部にモチーフを描かないもの。43は口縁部区画内に沈線を充填するもの。44・47は口縁部下端部分。45・46・48は頸部付近の破片。



0 S-13 10cm

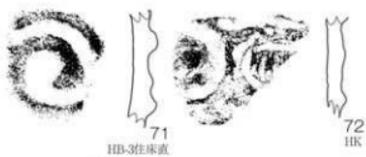
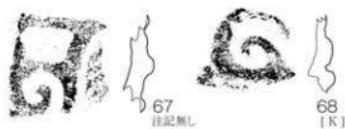
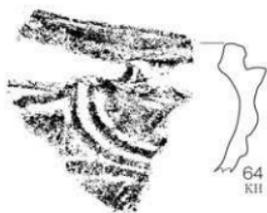


0 S=1:3 10cm

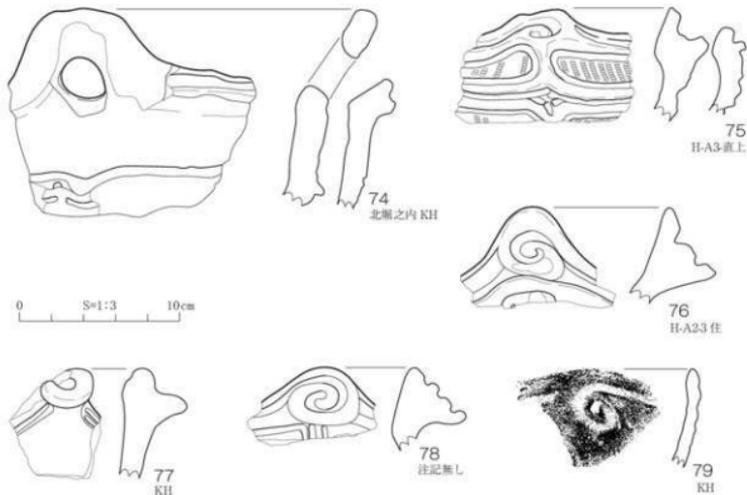


4. 加曾利E I 式新段階の土器

49は平縁で、縄文を施した方形の区画に平板な渦巻文を配し、頸部無文帯を持つ新段階の典型例。50～63もその類例である。62は他の隆帯に比べて高さがある。64は低い波状口縁で口唇直下に32のような溝状の凹みがあり、その部分を横U字状の隆帯で区切っている。65は上向きの弧状の隆帯が連なっており、隆帯には刻みが施される。66・72は区画内に沈線を充填する。67～73は隆帯による渦巻部分である。



0 S=1:3 10cm

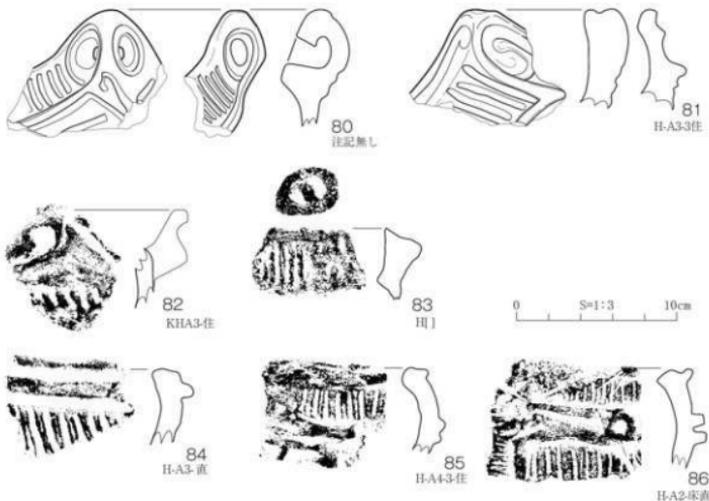


5. 加曾利E I 式中～新段階の土器

74～125は概ね加曾利E I 式中段階～新段階に併行すると考えられるものである。

74～78、87～94は大木8b式である。74は外反する環状の突起をもった口縁部破片で、突起部分の縁は剥離しているため不明だが、口唇部には1条の沈線が巡る。頸部にも1条の沈線が巡るがそれ以下も大きく剥離しており文様は不明である。75～78は16同様の口縁上に突出する渦巻文と、その左右の口唇部に沈線を巡らせる文様帯幅の狭いもの。75は幅狭の口縁部区画内に縄文を施すが、それ以外は無文ないし沈線文を描く。79はやや内湾する薄手の口縁部破片で浅い沈線で渦巻文を描く。

80～86・119は口縁部文様帯に縦位の沈線を充填するもの。80は立体突起をもつ波状口縁、81～



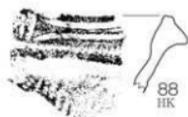
83は75～78と同様の突出する渦巻文である。84～86は平口縁である。119は口縁部文様帯に隆帯と充填された沈線をもち、胴部に綾杉状の短沈線を充填する。現存しないが、写真54の土器は胴部に3条1組のモチーフが描かれている。

87～94は前述のとおり大木86式で、87は楕円の隆帯が連続するもの、88・89は幅の狭い文様帯に沈線を巡らせる口縁部で、90はその直下。91～94は2～3条1組の縦位・横位・弧線沈線によるモチーフの一部である。

95～115は加曾利E I式の頸部～胴部破片である。95は頸部に隆帯を巡らし、胴部は地縄文の上に2条1組の直行する沈線とその間に蛇行する沈線を垂下させる。C群土器〔写真45・46〕の一部



87
H-B2-住直



88
HK



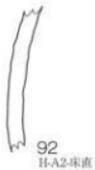
89
H-B4-3



90
H-B4-3住



91
HK



92
H-A2-床直

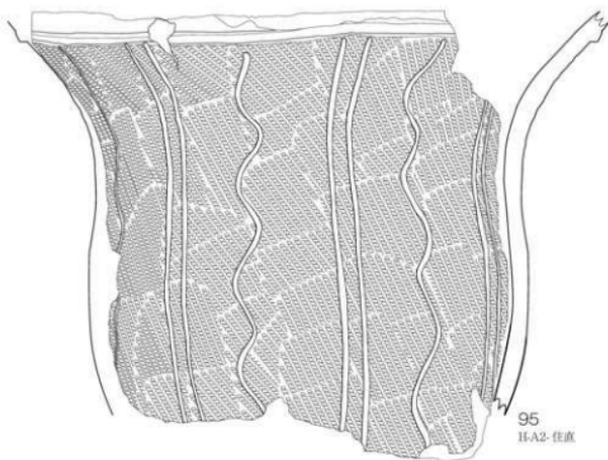


93
HK

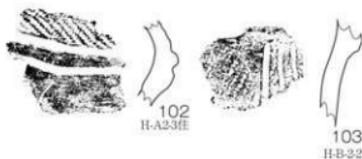
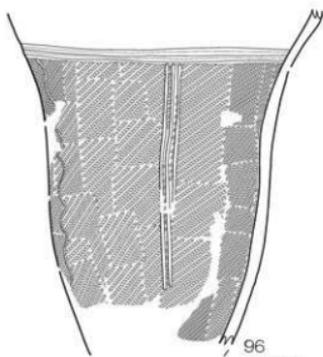


94
H-B4-床直

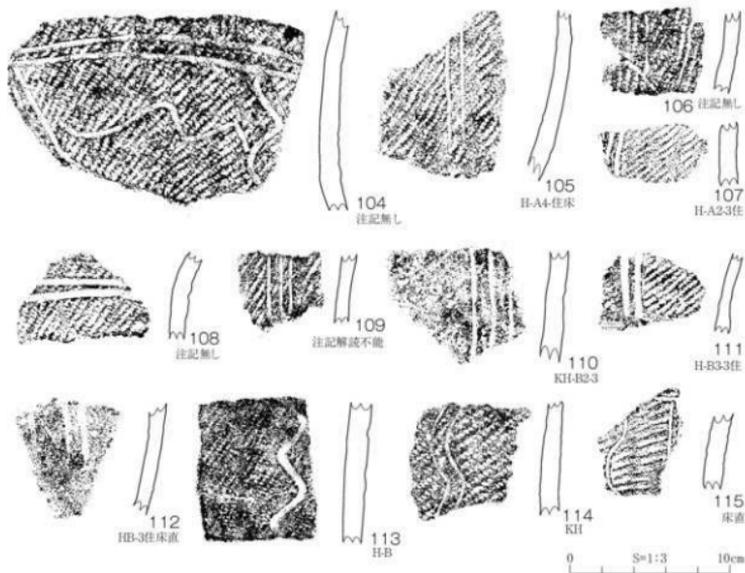
0 S=1:3 10cm

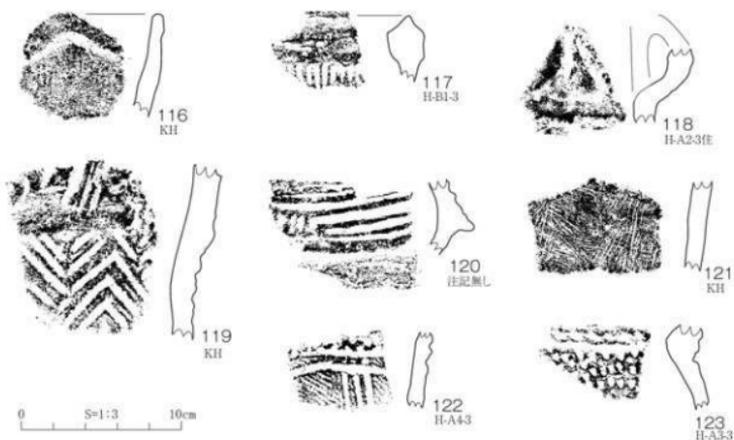


0 S=1:3 10cm



0 S-13 10cm

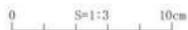
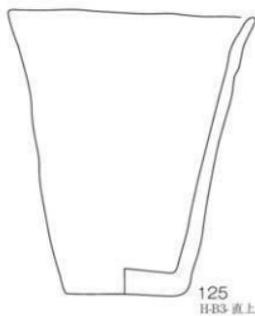
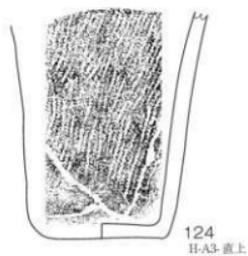




の可能性がある。96は頸部無文帯の下に3条の沈線を巡らし、95同様の胴部文様を持つ。97・100・102は縄文を施す口縁部文様帯と頸部無文帯を含むもの。99・101・102は頸部に隆帯を巡らすもの。

104～115は胴部破片である。104は横位に2条の隆帯を巡らし、斜めに直行する垂下沈線や縦位・横位に蛇行沈線を描く。105～107・109～112は2～3条の直行する垂下沈線、108は横位沈線、113～115は蛇行沈線を描く。

116～123は類型化が難しい破片。116は口唇直下に浅い沈線を巡らせる波状口縁破片。117は無文の突った口唇部をもち下部に縦位の沈線を充填するもの。118は縦位の橋状突起。119は前述。120は横位の沈線群の途中で刻みを施すもの。121は細く短い条線が施されるもの。122は交互刺突を持つ隆帯と沈線を横位に巡らし、下部は3条1組の沈線を垂下させるもの。123は隆帯・胴部に密に刺突



を施すもの。

124 は全面的に縄文を施すもの 125 は無文である。



6. 浅鉢・有孔鍔付土器・土器片加工円板

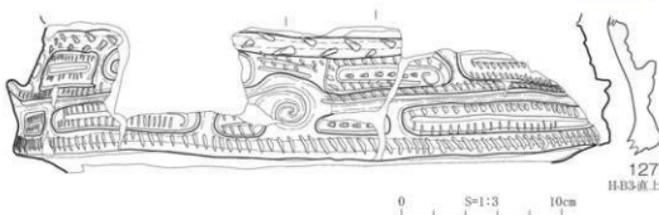
126・127 は口縁部と胴部（ほぼ欠損）が無文で、頸部に文様帯を持つ浅鉢である。共に交互刺突文・刻みを持った隆帯を上下端（127 は中段も）に巡らし、楕円形の単位区画を、126 は横に 6 区画、127 は 4 隅に上端が突出した渦巻文があり、その間を上下 2～3 区画を充填する。共に中峠 0 地点型深鉢の文様を施したもので加曾利 E I 式古段階である。126 は群馬県道前遺跡 JP50 に近似した例がある。127 は写真 53 では胴下半まで遺存しているが、今回は接合に至らなかった。

128～131 は無文の浅鉢で、129 は S 字状に屈曲するもの、130～131 は外反する口縁と内湾する胴



3D画像

3Dデータ

127
H-B3直上

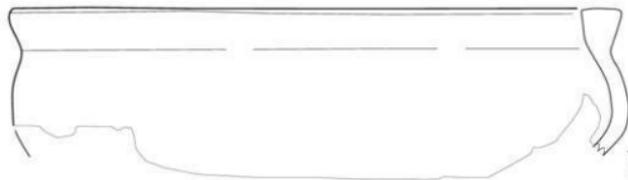
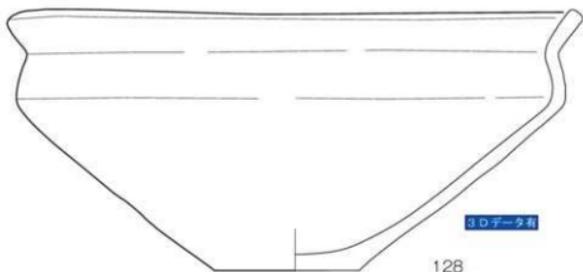
展開図 約15

部を持つ。129～131は赤彩の痕跡が残る。132は渦巻文を持ち左右に沈線を巡らせる。

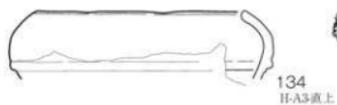
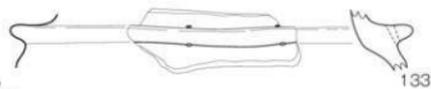
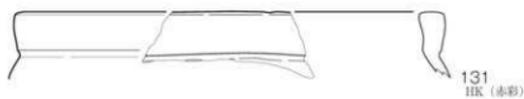
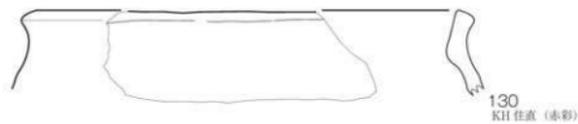
133は有孔罎付土器である。罎の付け根部に孔が穿たれている。

134は口縁部は内湾し、頸部に隆帯を巡らせる。20のような器形となる可能性がある。

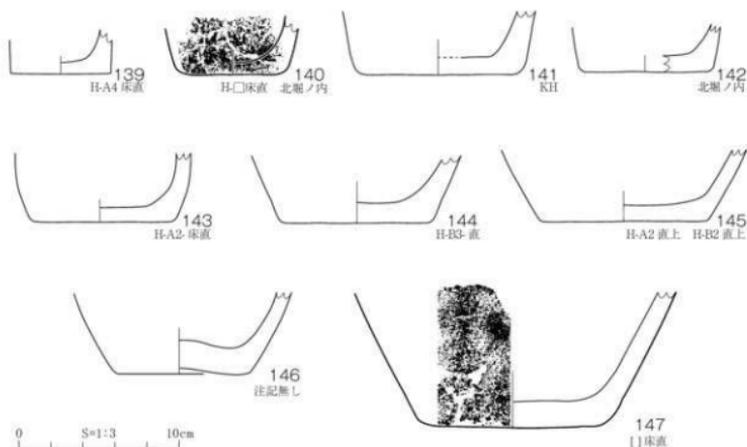
135～138は土器片加工円板である。



0 5 10cm
S=1:3



0 S=1:3 10cm



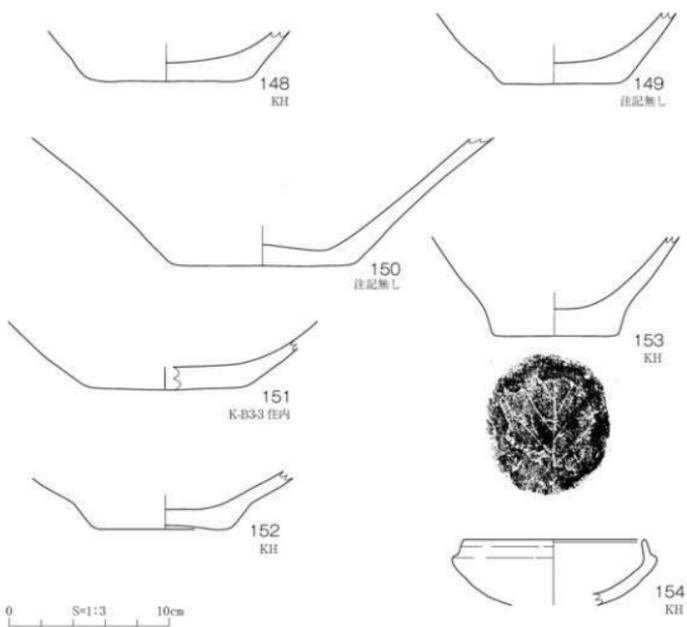
7. 底部・土師器

139～153は底部破片のうち底面が半分以上遺存しているものを抽出した。139～143は直立して立ち上がるもの、143～147はやや開いて立てちあがるもので深鉢の底部と考えられる。

148～153は強く開くもので浅鉢底部の可能性ある。

154は古墳時代後期（6世紀）の土師器杯である。ほかに薄手の土師器破片数点も出土している。

（中村）

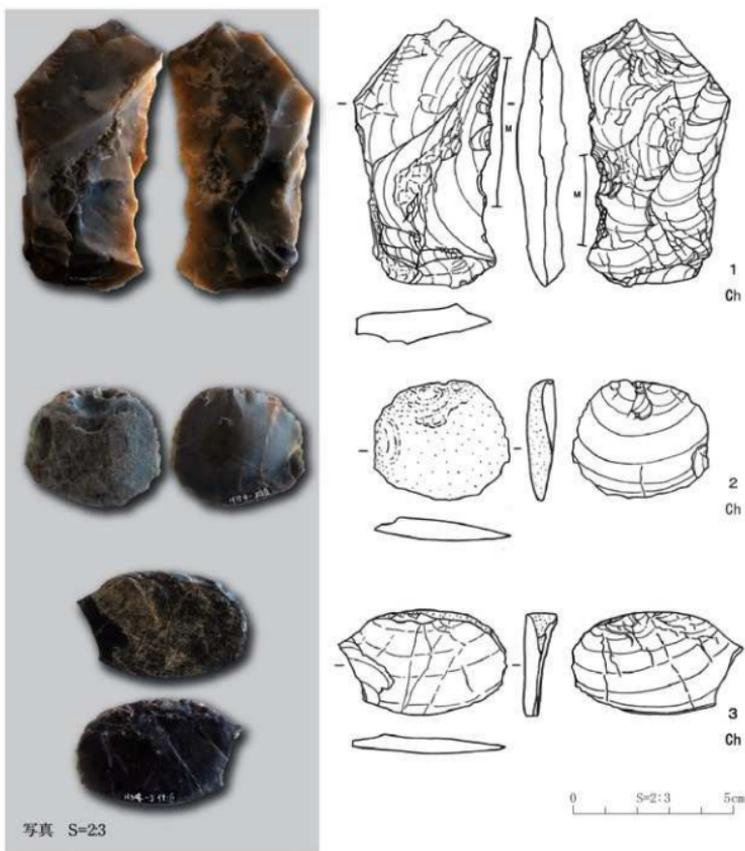


VI 縄文石器

これらの石器は資料カードでは、昭和63年4月31日に参考館に受け入れられた記載がある。しかし、現存する資料では小形石器や打製石器類の数量が少ない。おそらく、永年の経過の中で紛失してしまった可能性が高い。ここでは残存している石器について述べる。

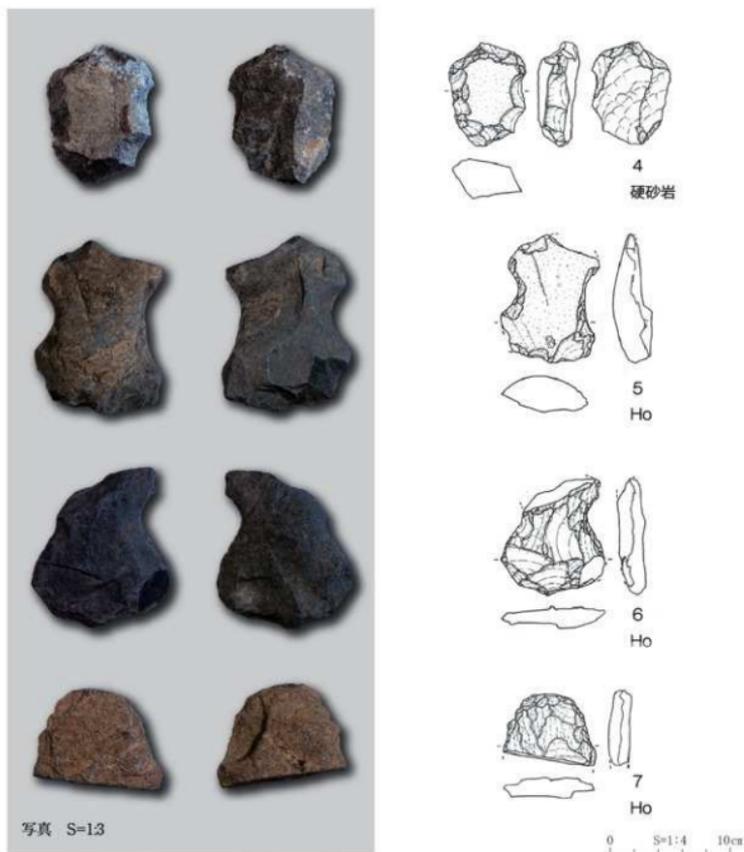
石器観察表

No.	器種	形態	石材	出土位置	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	備考
1	スケレイバー	皿	チャート		84.5	46.3	14.6	51.3	
2	剥片		チャート	HB4-3 住直	37.8	42.6	37.8	11.6	
3	剥片		チャート	HB4-3 住直	33.1	52.8	7.1	11.8	
4	打製石器		硬砂岩	KH	86.4	65.6	31.2	190.6	
5	打製石斧	分胴形	砂岩		109.7	78.9	24.1	237.7	御城田型
6	打製石斧	分胴形	砂岩		102.8	85.3	21.0	189.4	御城田型
7	打製石斧	不明	砂岩		57.8	76.7	59.1	99.5	
8	敲石	短冊形	砂岩	HB2-3 住直	147.0	61.9	22.1	267	
9	敲石	楕円形	砂岩		98.2	73.3	61.5	718	
10	砥石	中砥	砂岩		59.4	47.5	24.5	109	
11	凹石	円形	安山岩	HA-4 直上	97.3	84.4	56.6	410	
12	凹石	楕円形	安山岩	HA-2-3	122.1	83.8	40.3	528	
13	凹石	円形	安山岩	HB2-3 住内	87.3	74.9	52.2	355	
14	凹石	楕円形	安山岩	HB4-2 層	72.7	89.0	52.8	322	1/2 欠損
15	磨石	楕円形	安山岩		113.8	79.4	37.8	451	
16	磨石	楕円形	安山岩	HB2-?	105.5	89.4	60.0	598	
17	磨石	楕円形	安山岩	HB2-3 住内	117.4	94.4	40.0	591	1/2 欠損
18	磨石	楕円形	安山岩	HA-4 床直	89.6	64.2	39.9	350	
19	石皿	楕円形	安山岩		208.0	236.0	81.6		1/2 欠損
20	石皿	楕円形	安山岩	HB-3-1	123.1	122.6	85.0	1017	一部残存
21	石皿	楕円形	安山岩	HA-3 住内	89.3	38.8	94.2	267	一部残存



1. 押圧剥離系列の石器

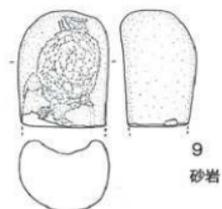
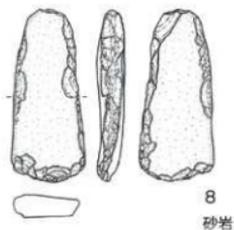
1はスクレイパーA類で、片側縁に縁辺微細剥離が観察される。石材はチャート製である。2・3は楕円形のチャート製の剥片である。いずれも円礫を輪切り状に剥離している。



2. 直接打撃系列の石器

4は硬砂岩製の楕円形片刃石器である。水平回転技法による製作されている。形態的にみて早期後葉（条痕文段階）の石器の可能性が高い。

5・6はホルンフェルス製の分鋼形を呈する打製石斧である。この形態の打製石斧は中期中葉に栃木地域で出現するとされている（小栗・小島1986）。御城田遺跡（396点）、上欠遺跡（767点）、三輪仲町遺跡（776点）、古宿遺跡（244点）など、栃木地域の中期中葉～後葉（加曽利E1～E4式期）の遺跡では大量に出土しており、偏平な河川礫を用いることが大きな特徴である（芹澤2002）。7はホルンフェルス製の打製石斧の一部である。おそらく、分鋼形の破損品と推定される。

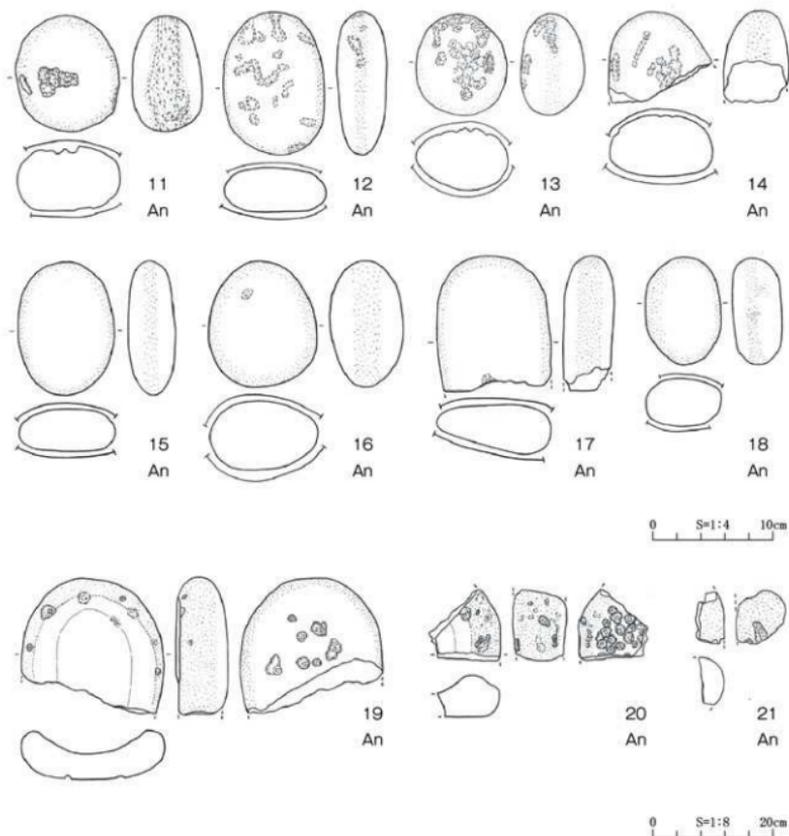


0 S=1:4 10cm

3. 使用痕系列（形状非選択）の石器

8は全周に顕著な敲打痕が認められるので敲石に分類した。形状と大きさから打製石斧の未成品の可能性もある。砂岩製である。9は砂岩製の敲石である。表面に顕著な敲打痕が認められ、大きく凹んでいる。10は砂岩製の砥石である。表裏両面に研磨痕が観察される。肌理の粗さから中砥に分類される。





4. 使用痕系列（形状選択）の石器

11～14は安山岩製の凹石である。いずれも破砕礫の角に打ちつけて凹を付けており、両面に磨面が認められる。11は磨→凹の順、それ以外は凹→磨の順に使用されている。いずれも両面に磨面が認められる。

15～18は安山岩製の磨石である。いずれも両面に磨面が認められる。19～21は安山岩製の石皿である。19・20は楕円形の厚い縁のあるもので、縁や裏面に凹が多数認められる。両者とも磨→凹の順に凹石と同様の凹が認められる。21は側縁部の破片である。

(大工原)

Ⅶ まとめと展望

1. 調査・研究の成果

Iでは、平川遺跡の調査資料について、①土器文化圏再編期の栃木の様相、②縄文時代中期の低地利用、③高等学校の部活動の3つの意義を指摘した。①と②は考古資料としての意義、③は高校教育史・考古学史的な意義である。これをうけ、IIで立地、IIIで調査経緯、IVで出土状況、Vで縄文土器、VIで縄文石器について詳しく検討した。おおむね、①とIV～VI、②とII、③とIIIが対応する。

平川遺跡の位置と低地の利用

IIでは地形と周辺遺跡の2つの面から平川遺跡の立地を検討した。平川遺跡は思川水系によって形成された低地の中で、扇状地先端の湧水群に近い微高地上に立地する。付近には田通遺跡や平柳三丁目遺跡などもあり、思川低地における中期～後期の活動に相応しいエリアであった可能性がある。

考古学部の活動と調査の経緯

國學院大學栃木高校考古学部は、栃木市周辺の分布調査や、各地の遺跡見学、國學院大學や國學院大學久我山高校の発掘調査などに参加していた。こうした中で生徒の家の所有地であった平川遺跡の調査が行われた。IIIで検討した写真をみると、グリッド設定の後、市松状に試掘し、その中で有望だったエリアを面的に調査したことがうかがえる。当時としては一般的な調査方法である。詳細な遺物出土状況写真が撮影され、遺存していないが平板による測量図も作成された。調査後は、注記、接合、修復などの基礎整理を行っている。当時、顧問の早川泉氏は國學院大學を卒業してまもない時期であり、部員たちは自分たちと年齢の近い若手教員とともに汗を流したのである。しかし、1981年には歴史部となり、遺物と記録の一部が散逸したまま1989年に学園参考館に移管された。「高校考古」の「全盛期」は1960年代で、文化財行政が整備された1970年代以降は「斜陽の時代」とされるが(市元1998)、栃木県では1969年から始まった東北自動車道予定地内の調査で、作新学院や宇都宮学院の高校生が主力の遺跡もあった。平川遺跡の調査資料はこうした時期の一事例と位置付けられる。

竪穴状遺構と土器の編年的位置

1965年、小林達雄氏は「吹上パターン」論を提唱し、遺物の出土状況に注意を促した。また、この頃、後に中幹式とされる「pre式」の存在が注意され(高橋1965)、山内清男氏の著作が再販された(山内1967)。栃木県内では1957年の大田原市湯坂遺跡の調査以来、加曾利E式出現期に関する関心が高まっていた。当初の調査目的は定かではないが、こうした中で行われた平川遺跡の調査では、土器の出土状況が注意され、詳細な写真記録が残された。今日的な研究成果をもとにすると、「床直」と注記された出土土器群は、加曾利E I式古段階・中段階・新段階にわかれ、おそらく中段階を主体とする。これに対し出土状況写真をみると、例えば古段階とした土器〔写真47〕、中段階の土器〔写真46など〕よりも上から出土するなど、時期幅のあるものが散在した状況である。

これらの土器は、東北・県北との関わりを示す立体突起・大木式・大木式系の突出する渦巻や狭い文様帯などの要素、南東関東との関わりを示す中幹O地点型、良文B地点型、縦位沈線を充填する口縁部などの要素が主体を占めるが、県北部には少ない頸部無文帯などの南西関東との関わりを示す要素も目立っている。小破片だが、有孔鈎付土器も西南関東・中部・北陸に分布の主体がある。平川遺跡の

土器群は、大転換期としての議論の渦中にある加曽利EⅠ式古段階よりもやや新しい時期を主体とするが、加曽利EⅠ式が齊一化していく中で、前時期までの様々な系統がいかに遺存あるいは融合していくかという視点を与えてくれる。

2. 活用に向けての展望

本書の刊行によって基礎整理が終了し、さらなる研究・教育への活用の道が開かれた。

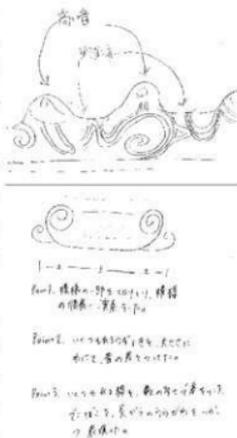
一言で活用といっても、その対象によって内容は異なる。短期大学日本史フィールドにおいては、従来も考古学実習での観察・図化の練習や博物館実習の教材として利用されてきたが、本書で整理した系統差・地域差などの考古学的位置づけを踏まえた、より深い理解やそれにもとづく展示発信が期待される。もちろん、考古学的な検討そのものもより深めていく余地は大きい。

高校による調査資料としては、本学園高校・中学校においても活用が期待される。市元晃(2018)は、学校資料には①教員にとっての教材・②生徒にとっての研究素材・③学校にとっての威信財という独自の価値が備わっていると、その重要性を指摘する。市元は散逸・消滅の危機を指摘する一方、高校に在って初めて価値を発揮するとも述べ、散逸を防ぐには継続した活用の必要性を訴えている。平川遺跡の場合、資料の所管は高校から参考館に移ったが、学園全体の施設であり、例年本学園の中学校が見学を訪れている。初めての考古学への接点として先輩たちが掘った土器は強い印象を与える。地域博物館への移管とは異なる本学園の特色を活かした学園内の連携を深めた活用が可能であろう。

3つ目は、地域全体での活用であり、地域連携活動としての本領もここにある。地元地区との連携は今後の課題だが、中根八幡遺跡については、栃木市との連携による学生の報告会、市役所や資料館での展示、地域のイベントへの出展などを重ねており、2022年度は専門家による講演会・ワークショップも実施されている。また、下記のように既に一部学外での活用も行っている。

様々な活用の1つとして、中村は短大人間教育学科の早川富美子教授とともに《縄文土器をもとにした音楽づくり》のプログラムを開発中である。土器の形・文様・質感を、木の実・豆・骨・貝などの自然素材で音楽として表現するもので、地紋・沈線・隆帯などの施文方法や、繰り返し・強調・重なりなどの文様配置のバリエーションが豊富な平川遺跡の土器は格好の素材となる。実物の土器を観察し、当時のくらしに思いをさせ、その解釈をグループ内で共有しながら自分たちなりの創造的な音楽に仕上げていくものである。既に学外の小・中学校や公民館でも活用しているが、本学園中学校の生徒のメモを提示しておく〔第12図〕(中村・早川2023)。

なお、講座等においては、3Dデータによって実物を補完することができる。本書に掲載した展開データは上記プログラムでの文様観察のために作成したものが、短大授業のほか、市内外の小・中学校の社会科・総合的学習の時間の出前授業でも実績があり(中村2022)、実物と3Dデータを併用できる教材として本資料群を活用できる。公開データであり、学外者の利用も容易である。(中村)



第12図 音楽づくりの一例

参考文献

【I】 平川遺跡の意義と本書の目的

- 市元 崇 2018 「高校考古の課題と可能性-特に遺跡・遺物の保存と活用の観点から-」『明日への文化財』第78号
 市元 崇・池内一誠 2014 「高校考古資料の調査-学校現場での活用を視野に-」『東風西声 九州国立博物館紀要』10
 上野修一 1989 「栃木県における縄文時代の低地遺跡」『栃木県考古学会誌』第11号
 江原 英 2006 「阿玉台式の伝統と「中峙式」の地点型」の成立(覚書)-寺野東遺跡と高田遺跡出土土器の観察から-」『栃木県考古学会誌』第27号
 海老原郁雄 1999 「投擲の縄文中・後期文化」『企画展よみがえる縄文人』ミュージアム氏家
 田・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産を活用した地域活性化事業実行委員会 2017・2018 「田・梅の宮宿、本沢河岸周辺の歴史的資産に係る調査報告書1・2」
 九州国立博物館 2014・2016・2018 「全国高等学校考古名品展」
 國學院大學栃木短期大学「大平山の歴史遺産調査隊」2016 「大平山の石造物」平成27年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書
 國學院大學栃木短期大学栃木市城内1号墳学術調査団 2016 「栃木市城内1号墳(圓通寺古墳)学術発掘調査概要報告1・2」『栃木県考古学会誌』第37～38号
 國學院大學栃木短期大学近世史研究会と伝承の会 2017～2020 「大平山神社の絵馬」平成28年度～令和元年度栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業成果報告書
 塚本師也 2004 「栃木県南部域の土器と焼町土器 分布圏外の焼町土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
 塚本師也 2014 「近接する遺跡間における同一年代の縄文土器の比較- 栃木県益子町御堂前遺跡と茂木町松の木遺跡の中期縄文土器を対象として-」『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第22号
 中根八幡遺跡学術発掘調査団 2016～2021・2023 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第1～6・7次学術発掘調査報告」『文化財学報』34～38・40
 中根八幡遺跡学術発掘調査団 2022 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第6次学術発掘調査報告」國學院大學栃木短期大学

【II】 平川遺跡の立地

- 上野修一 1989 「栃木県における縄文時代の低地遺跡」『栃木県考古学会誌』第11号
 地区資料編纂会 1989 『明治前期関東平野地誌図集』柏書房
 都賀町 1989 『都賀町史 歴史編』(北峰遺跡・孫八山遺跡・郷長山遺跡)
 栃木県 1972 『栃木県史 資料編考古II』
 栃木県企画部土地対策課 1984 「土地分類基本調査 壬生」
 栃木県企画部土地対策課 1986 「土地分類基本調査 深谷・古河・小山」
 栃木県企画部土地対策課 1987 「土地分類基本調査 栃木」
 栃木県教育委員会 1972 「後藤遺跡」『東北自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
 栃木県教育委員会 1981 「栃木県藤岡町篠山貝塚発掘調査報告書」
 栃木県教育委員会 1997 「栃木県埋蔵文化財地図」
 栃木県文化振興事業団 1986 「下野国府跡寄居地区遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第78集
 栃木県文化振興事業団 1990 「小倉玉神社裏遺跡・水木東遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第109集
 栃木県文化振興事業団 1996 「大塚遺跡群」栃木県埋蔵文化財調査報告第173集
 栃木県文化振興事業団 1997・1999 「藤岡神社遺跡(遺構編)・(遺物編)」栃木県埋蔵文化財調査報告第197集
 栃木市 1982 「栃木市史 史料編(自然・原始)」
 栃木市教育委員会 2015 「栃木市遺跡分布地図」
 栃木市教育委員会 2006 「田通遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第6集
 栃木市教育委員会 2020 「臨谷遺跡」
 とちぎ生涯学習文化財団 2001 「藤岡神社遺跡(本文編)」栃木県埋蔵文化財調査報告第197集
 とちぎ生涯学習文化財団 2001 「大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第244集
 西方町 2011 「西方町史」
 林謙作 1982 「星野山口台」『栃木市星野遺跡第1次発掘調査報告』栃木市教育委員会
 藤岡町 2003 「藤岡町史 資料編 考古」
 藤岡町教育委員会 2003 「栃木県藤岡町城山遺跡・城山南遺跡」

【III】 調査・整理の経緯と方法

- 大工原豊 2020 「縄文石器の記載方法」『縄文石器提要』ニューサイエンス社
 中村耕作 2020 「博物館実習生は3Dの何に魅力を感じたか? -「こくとち360°まるみミュージアム」の取り組み-」『考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン: 考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン online 予稿集 #02』オンライン版
 中村耕作 2021 「学芸員課程における地域資源の利活用の現状と課題」『金博協研究紀要』第23号
 中村耕作 2022 「大学による考古資料の3Dデータ化と公開・活用」『デジタル技術による文化財情報の記録と活用4』

奈良文化財研究所

早川 泉 1981 『北郷の内遺跡』『日本考古学年報 21・22・23 (1968年度・1969年度・1970年度版)』

【V 縄文土器】

- 猪瀬美奈子 2006 『時間軸の設定について』『島田遺跡Ⅴ』上三川町埋蔵文化財調査報告書第33集
 上野修一 1984 『栃木県の縄文時代中期中葉の土器素描』『はなびらく縄文文化』栃木県立博物館
 海老原郁雄 1979 『栃木県における加曾利E1式の成立と展開』『湯城遺跡』大田原市教育委員会
 海老原郁雄 1981 『栃木県日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウム1 北関東を中心とする縄文中期の諸問題 資料』
 江原 英 1999 『成果と問題点』『寺野東遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会
 江原 英 2006 『阿玉台式の伝統と「中時式0地型型」の成立(覚書) - 寺野東遺跡と島田遺跡出土土器の観察から -』『栃木県考古学会誌』第27号
 合田恵美子 2000 『縄文土器について』『御霊前遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告書第236集
 後藤信祐 1996 『遺物について』『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告書第171集
 下総考古学研究会 1976 『中時式土器の研究』『下総考古学』15
 下総考古学研究会 1998 『特集 中時式土器の再検討』『下総考古学』15
 下総考古学研究会 2021 『特集 房総半島および周辺地域における大木諸型式(7b式～8b式)の研究』『下総考古学』15
 縄文セミナーの会 2014 『第27回縄文センター 縄文中期浅鉢形土器の諸様相』
 縄文中期集落研究グループ 1995 『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地 発表要旨・資料』
 芹沢清八 1985 『出土土器の分析と編年の位置づけについて』『御城田』栃木県埋蔵文化財調査報告書第68集
 谷井 彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田 勝 1982 『縄文中期土器群の再編』『埼玉埋蔵文化財調査事業団研究紀要』1982
 塚原孝一 1994 『中期前葉から後期前葉の土器の分類と編年の位置づけについて』『三輪神町遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第143集
 塚本師也 1997 『中期縄文土器について』『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第196集
 塚本師也 2014 『近接する遺跡間における同一年代の縄文土器の比較 - 栃木県益子町御霊前遺跡と茂木町松の木遺跡の中期縄文土器を対象として -』『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第22号
 塚本師也 2015 『近接する遺跡間における同一年代の縄文土器の比較(2) - 八溝山地西麓と東麓の中期縄文土器を対象として -』『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第23号
 塚本師也 2016 『那珂川流域の加曾利E1式初期期の地域差』『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第24号
 塚本師也 2017 『茨城県常陸大宮市滝ノ上遺跡群の中期中葉の土器様相』『茨城県考古学協会誌』第29号
 塚本師也 2019 『栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年』『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第27号
 徳留彰紀 2017 『荒川中流域の勝飯3式と加曾利E1式』『研究会集縄文研究の地平2017 - 土器から探る勝飯式と加曾利E1式の関 - 発表要旨・資料集』縄文研究の地平グループ・セツメント研究会
 中村信博 2000 『出土土器の編年の位置づけ』『松の木遺跡Ⅱ』
 細田 勝 2008 『加曾利E1式土器』『総覧縄文土器』アム・プロモーション

【VI 縄文石器】

- 小栗一夫・小島正裕 1986 『「分銅形」打製石斧の系譜(覚書)』『東京考古』4
 芹沢清八 2002 『縄文時代中期末から晩期の打製斧形石器 - 栃木県内の分析をもとに -』『第10回岩宿フォーラム/シンポジウム 石斧の系譜 - 打製斧形石器の出現から終焉を遡る - 予稿集』並野岩宿文化資料館

【VII まとめと展望】

- 市元 翠 2018 『高校考古の課題と可能性 - 特に遺跡・遺物の保存と活用の観点から -』『明日への文化財』第78号
 小林達雄 1965 『遺物埋没状態及びそれに派生する問題(土器腐蝕処分の問題)』『米島貝塚』庄和町教育委員会
 高橋良治 1965 『阿玉台式土器の研究の現状と問題点』『考古学手続』25
 中村耕作 2022 『大学による考古資料の3Dデータ化と公開・活用』『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用4』奈良文化財研究所
 中村耕作・早川富美子 2023 『縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み(第6報)』『國學院大學栃木短期大学紀要』第57号
 山内清男 1942 『山内清男先史考古学論文集』第1冊(日本遠古之文化新編)第6～10冊(日本先史土器図譜再版)

【レイアウト参考】

- 北本市教育委員会 2017 『デーノタメ遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第21集
 坂北村教育委員会 2005 『坂北村東郷遺跡』

報告書抄録

ふりがな：とちぎしひらかわいせきしゅつどひんせいりほうこくしょ
書名：栃木市平川遺跡出土品整理報告書
編集機関：國學院大學栃木短期大学考古学研究会
編集機関所在地：〒 328-8588 栃木市平井町 608 國學院大學栃木短期大学内
発行年月日：2023年3月31日

遺跡名：平川遺跡（ひらかわいせき）
所在地：栃木県栃木市大宮町字北堀ノ内（栃木市大宮町 2449）
市町村コード：092037
遺跡番号：5636
北緯（世界測地系）：36度 24分 15.21秒 36.404225
東経（世界測地系）：139度 44分 55.10秒 139.748640
調査期間：19690721-19690730
調査面積：32㎡
調査原因：学術調査

遺跡概要

種別：集落
時代：縄文中期

特記事項：國學院大學栃木高等学校考古学部による学術調査で加曾利 E I 式期の竪穴状遺構 1 基を発掘した。
整理は、國學院大學栃木短期大学の地域連携活動の一環として行い、周辺各地の系統の多数の土器群とこれに伴う石器を報告した。

印刷仕様

表紙 コート 135g（マット PP 加工）
本文 コート 90g
オフセット印刷
無縫綴じ製本

栃木市平川遺跡出土品整理報告書

2023年3月31日
編集：國學院大學栃木短期大学考古学研究会
発行：國學院大學栃木短期大学
〒 328-8588 栃木市平井町 608

本書は 2020～2022 年度栃木県大学地域連携活動支援事業の成果の一部です。
本書は著作権者の承諾なく複製して利用できません。PDF 版は「全国遺跡報告総覧」で公開します。